

山岳時報

時 報

No. 1

1962年2月

京都大学学士山岳会

感 想

AACK 会 長
桑 原 武 夫

創刊おめでとう。しかし、この雑誌はAACKの理想を天下に宣揚し、その業績を世界に誇示するために発刊されたのではあるまい。むしろ内に向って、会員相互の親睦をはかり、同時にAACKの今後の方針を相談するための部内雑誌だと思つたので、私も会長の抱負を語るといったことでなく、たまたま会長の地位にいる一会員として、一、二感想をかいてみた。

AACKも創立以来30年以上たった。そのあいだには実にさまざまなことがあった。しかし、私はむしろ不活潑な会員で、戦後までの時期の歴史を語る適格者ではない(その初期の歴史はこの号にも載っているが、老輩の記憶力がおとろえぬうちに、ちゃんとした記録はとっておいてほしい)。

私とAACKの関係は戦後密接なものとなった。戦争中ひっそくしていた会を再組織し、海外遠征を本気で考えようという気運がおこったとき、昭和23年に京大へ戻ってきていた私が再建委員長なるものには選ばれたからである。登山業績の低い私をなぜ選んだのか。多分、やや知名の士となりつつあり、またAACKの老輩連中とずっと良好な人間関係にある私を利用しようとしたのであろう。利用というコトバはイヤライイかも知れぬ。しかし、何らかの仕事を実現しようとする目的意識をもつ集団ないし組織においては、いつもそうした発想があり、それは組織としては健康な発想法なのである。大よそそのように私は理解して、委員長の仕事をよろこんで引受けた。やがて会長となり、チョゴリザ遠征隊長となったのも同じ考え方からである。

ひとがある地位につくのは、みずから求めて獲得するのと、他動的にあたえられるものがある。いずれの場合でも、自分の能力を知っておかねばならない。あたえられたらなんでももらおうというのでは困る。しかし能力の自己評点がスレスレのところ、いわば運命の選択といった感じをもって、受けとめることもあるのである。私が『チョゴリザ登頂』の「はしがき」でみずからを「幸運な隊長」と規定したのは、若干の含蓄をもたせたつもりである。あの遠征中、苦しくてたまらぬ日が二、三日あった。重い足を引きずるとき、私はあたえられた運命は成就しなければならぬ、と幾度か思い、そう思うと出しかけたアゴが引っこんだ。

とはいえ、ある地位についたら、それがあたえられたものであろうとも、みずから求めたかのように、そ

の努めをはたすべきである。人間だれしも弱点はあるが、いたずらに謙遜になっては仕事ははかどらない。だいいち対外的にそれは許せないことである。自信をよそおい、そうすることによって自信をもつようになるべきである。それは虚勢と見えることもありうる。こうした心理的事情がわからぬ人は、「長」になることのできぬ人であり、なってはいけない。

さて私も長いあいだ名誉ある会長の地位をふさいできたが、サルトロ・カンリ遠征が終わったら、やめさせてもらいたいと考えている。ほかにもやたらに仕事が多く、「多忙は辛抱すればよいではないか」というかも知れぬが、身体にも限度がある上に、疲れるとつい手をぬき、あるいは浮ぶべき知恵が適時に浮かばず、いつの間にか会に不利をもたらすからである。

それよりもっと重大なのは、AACKも一種の曲り角にさしかかっているのではないと思われるからである。アンナブルナ、今西寿雄のマナスル登頂、カラコラム・ヒンズークン、西堀栄三郎の南極越冬、チョゴリザ、ノジャックと、AACKは、もちろん会員の努力によるが、幸運の星にみちびかれてきた。その星は信じてよいが、その星の光のみで同じ行き方をつづけるか、問題にすべきところへ来ているように思われる。

ヒマラヤには大きな処女峯が次第になくなってきた。もちろん、7000、6000級にまだいくつも残ってはいる。しかし、いかにシニセのキャンがあるといっても7654→7490→7??と、しだいに標高を低くめてゆくとすれば、たとえ登攀技術的にいかに困難度が増大したとしても、ヒマラヤ登山史的には、またニュース・ヴァリュー的には、したがって募金成功率的には、価値の低下をまぬがれない。その登山目標を今後どう設定するか。

それに日本における資本の過当競争と並行的に、海外遠征も年々過当競争となる傾向にあり、その派遣数は日本が世界最高である。これはそれ自体好ましい傾向とは思えぬが、これを押える方法はどこにもない。その中でいかにしてAACKの独自性を主張してゆくのか。ビルマのカカルボラジなどは見事な着眼だったが、国際政治がこれを不可能にした。そうした国際政治による圧は、ゴザインターンはもちろん、パキスタン、インド、ブータンなど多くのところでむしろ増大の見とおしの方が大きい。ヒマラヤ山系にかぎつ

目 次

感 想……………	AACK 会長 桑 原 武 夫 (1)
AACKの30年 —その1—……………	北 村 泰 一 (2)
チョゴリザ以後のAACK……………	平 井 一 正 (5)
カラコラム登山の可能性についての一考察…	岩 坪 五 郎 (6)
水 曜 講 座 —その1—	
サルトロ・カンリ小史……………	酒 井 敏 明 (10)
高 村 通 信……………	高 村 泰 雄 (16)
G・O・ディレンフルト教授の『第三の極地』をめぐって	
……………	薬 師 義 美 (24)
ANTARCTICA—The Story of a Continent—	
……………	北 村 泰 一 (25)
会 員 紹 介	
木 原 均 氏……………	並 河 功
並 河 功 氏……………	並 河 治
佐 島 敬 愛 氏……………	酒 戸 弥 二 郎
会 員 の 動 き	

—この表紙の“AACK”の文字は、カスティラオによってイタリヤ語に訳され、セベリアにて1503年出版されたマルコポーロ著「東方見聞録」より採写したものである。京都大学図書館蔵—

たことはない。ほかに進出せよ、と口でいうのは楽だが、アラスカ、アンデスなどみな他の日本の大学が手をつけている。AACKはパイオニア的な仕事をえらぶ会ではなかったか。こうした状況の中で、国際政治を研究し地理をしらべて、なるほどと思わせるにたる新しい目標を設定するのは、若い人々の新しい精神でなければなるまい。苦しまぎれの双子山、というのではなく、もっと卓抜な線が出なければなるまい。老輩には、少なくとも私には、そうした線は出せない。退くべきである。

最近のイギリス隊の例にない、費用の大幅引下げの研究も必要だが、中尾佐助がいつも主張するように、小人数で気軽に出かけるパーティの工夫も考慮してみる必要がある。もっともこの行き方をすると、全AACKがさらに京都大学という権威をかりて、全体的に動くのではなく、個人の集まりという形をとる傾向になるだろう。大幅の募金は行なわず(またそれは困難となる)、隊員個人負担の部分がふえ、つまり集団主義から近代個人主義への転換という思想の問題にもつらなっていくはずである。近代主義的個人の集まりが、前近代の同志の結合にまさるエネルギーを出しうるかどうか。日本社会の現状において私はいささか懐疑的だが、エネルギーを出しうるとすれば、その条件はなにか考究すべきである。もっとも一つの大学のOBが他人さまの金を集めて、大きな部隊で遠征するという虫のよい形式はもう古くなりつつあるのかも知れない。

こういう小部隊の遠征が行なわれることになれば、逆に、そうした経験者から優秀なものを選抜して、日本全体として一つの大パーティを出す(アメリカやイタリーのよう)にことになってゆくキッカケとなるかも知れない。今までのところでは、マナスルも若干もたつき、ヒマルチュリもJACより慶応が成功したという例もあって、同窓会型が成功率が多かったから、現実的に考えると一挙に切りかえはむづかしからうが、早晚問題化するに違いない。科学研究では大学の単位をこえた協力がすでにさかんである。都会のラボラトリと氷雪の岩峯ではちがうともいえるが、人間の思想は時代とともに動くということは否定できない。

いろいろ問題点らしいものを書いてみたが、どうやら私のこの問題のつかみ方自体が、尖鋭な即物性に欠けておるように思われ、いよいよ引退の必要性を痛感させるのである。

昭三組の老輩が、もし1日に全部死んでしまったらどうなるか。そういう仮定をおいて、中堅ならびに若手の諸君は本気でAACKの今後のあり方を検討してほしい。次号に、議論の花がにぎやかに咲くことを期待して、くどきめいた感想をおわる。



後記

この時サルトロ・カンリ許可の快報が入った。昭三組引退事業として、これには全力をそそいで成功せしめたい。
桑原



AACKの30年—その1—

北村 泰一

<前記>

◆ AACKも30年の昔ともなれば一昔、その昔を知っている人達はだんだん少なくなってきた。後から続く若い人達にとっても、先輩よりきき伝えられる機会も段々少なくなり、やがてそれは消滅してしまうかも知れない。これではいけない。AACKがどんな背景をもち、昔の先輩がどんな考え方をして今日のAACKを創り上げていったか、前稿桑原会長の稿にもみられる様に、昭三組の引退が紙上に表われ出した今日、これらの事は是非はつきりした活字にしておくなくてはならない。

◆ こうした希望から、その第一稿としてこの稿をかいた。従ってこれは予稿の予稿程度の積りである。文献参照も少なく、主として今西錦司・浅井東一・西堀栄三郎の諸先生の話の骨幹とし、梅棹忠夫氏に補足して戴きつつ書いたものである。だから話は或場合には片寄る可能性もある。従ってこの稿にもれている話は、どんな事でも多少に拘わらず大観迎、将来のより完全なものへの種としく思います。連絡を下されば、話を聴きにも参上致します。読者諸先輩、諸氏の連絡をお待ちしている。

◆ 猶執筆はオムニバス形式を採った。第一稿を北村泰一が、第二稿を平井一正が分担することになっている。若しどなたでも意志のある方があれば、これも大観迎である。ふるって参加下さい。

◆ 更にもう一つ。この稿は第四稿でもって終る予定である。前稿桑原会長の稿でも述べられている様に、AACKの今後の在り方という問題は、今の我々にとって大きな問題である。この第四稿が完成すると一応AACKの30年の歩みを知る事になり、

そこから自ら今後の在り方等という問題の一端の解答も出てくるのではないかと期待している。第四稿が終った時には、こうした問題も採り上げたいと思っている。諸先輩諸氏の投稿をお待ちしている。



AACKの底流をなす一つの思想、そしてその歩み方には自ら他と異なるユニークなものがあることは否めない事実である。そこで、人々は一つの疑問をもつに疑いない。こうした思想がどうして生れ、育って来たか。突然にこうしたものが生れたのでは決してあるまい。そこには広い意味での(それは人間的にもまた地理的、歴史的にも)「京都」という背景が必要だったに違いない。それを知りたい。こうした希望がこの稿をおこす基となった。そして、その創設期より現在まで、如何にそれが発展し、如何なる思想の下に遠征計画が立てられ、実行されていったか。中には陽の目も見ずにうずもれてしまった計画もあろう。しかしその中には、それが戦後の計画に連なるものも幾つかある。ここではこうしたものも採り上げて、現在の計画が如何に古い計画と連らなっていくかといった動的、有機的な意味をも含めてAACK30年の動きを眺めてみたい。……こうした希望と更に発展していった。唯ここに注意すべきは、AACK30年の歩みといっても、正確にはこの表現は正当を得ないものである。何故ならAACK創設以来AACK主体で計画実行した遠征は案外少ないのである。つまり戦前では白頭山、戦後になってアンナプルナ、チョゴリザ、そしてノジャックと、ほんの数える程しかない事を知って読者は驚ろくかも知れない。しかし遠征実施主体が如何に変わろうとも、こうした一連の遠征を構成するメンバーの大部分はAACK会員である。ここに問題がある。つまり結論を云えばAACKとは何は昔から一つの独立した大きなものではなく、それはより大きな流れの中の一つの小川に過ぎなかつたのであり、これらの変遷を理解するには、やはり時代の流れを理解する必要もあり、これらについては後の稿で述べられる筈である。こういう訳で我々は今日のAACKの発展の様子を眺めるのに、例えばそれはドイツ史を理解するにはフランス史を英国史を、つまりヨーロッパ史を、いや更に世界史を理解せねばならず、こうした意味でこうしたスケールで、AACKを我々は眺めたい。AACK会員が何を考え、そして何を求めて海外に散らばっていったか、こうしたAACK会員活動史ともいったものにならざるを得ない訳である。



先ず最初の疑問に入ろう。AACKの底に脈々と流れる一つの流れ。それを若し言葉で表わすなら平凡ながら「先駆者精神」、絶えず新らしいものを採り入れつつ(それも二流三流のものを見向きもせず、当世

一流のもののみ採り入れる。ここにAcademicなるゆえんがあるのだが)、そして未知を求めて歩み続ける。それは例えば如何に外車の出物の良いのがあっても、人様の手のついたものは気乗りがしない。国産で真新しいもの、しかも一流国産車ならば乗ってやろう。まあ一口に云えばこんなところであろうが、こうした考え方がどうして京都に生れたものであろうか。それにはやはり先ず京都という歴史的・文化的条件を忘れる事は出来ないのである。

元来京都は古来文化の中心であり、そのポテンシャル・エネルギーは今に至るまでも京都人の底流として続いている。既にして明治の初期、日本最初の電車を市内に走らせてみたり、いや更に古く日本最初の近代水道を造りビワ湖の水を引き、そして日本最初の水力発電所を造った(この発電所は世界でも五番目とかいう)。こうしたことをみても、京都は千年の都であったという、とかく保守的な空気の中にあっても、絶えず新しいものを求め続けて来たことがよくうかがわれるのである。

思想にしても革進的な思想・学問にしても我々が秘かに誇りとする、平均値をうんとはずれた学者は十指ではとても数え切れまい。これは何故なのだろうか。我々はこう考える。つまり京都には夢があるからだ。現実にはそれが成功するか否かは別として、魅惑的な未来にその全身を投げ出す人間が、いつの世にも必ず幾人か居るからだ。こうして京都の生活にはその背景に絶えず夢が存在し、新らしい事とはこうした夢が現実に実現したものとも云えるであろう。

先にも書いた通り、ドイツ史を理解するにはヨーロッパ史を、世界史を理解しなくてはならない如く、AACK創設には更に遡って京都の登山史がどの様にAACKに影響しているかを見なくてはならない。

先ず京都の先覚者として、我々の頭に浮ぶものは石崎光瑠の名である。古い「山岳」をくってみると、石崎氏の名は諸々に見える。明治年初登、明治年遡行等と。石崎氏は画家で、日本画家として日本アルプスの自然美を描きたいという気持が彼を山岳に興味を持たせた動機という。やがて彼はヒマラヤ、カシミヤ地方に出かける。面白い事には当時日本の山岳会の活動的な人達の大部分が、先ず本場アルプスでも練習してとでもいう気からか欧州アルプス党であったとき、この石崎光瑠は真直にヒマラヤ入りをし、当時の人々の多くがヒマラヤを未だ遙げきものとしているとき、既にその足でヒマラヤの土を踏み、夢を現実化へと実行した人の一人であった。無論当時は装備技術共、今日とは較べものにならぬのでとても今日の意味でヒマラヤ登山とは云い難いかも知れないけれど、河口慧海等と異り、例え彼の気持に画家としてヒマラヤの霊峰の下、咲き乱れるシャクナゲを日本画に描きた

い気持はあったにしても、他の一端とにかく登山という強い気持をもってヒマラヤ入りをしたのはこの石崎光瑠をもって嚆矢とするのではなからうか(この辺り古い「山岳」をみても記録はない)。帰京後、石崎は当時の三高山岳会(当時は未だ山岳部とは云わなかった)が催おしていた、年一回の公開講演で彼の行ったカンミヤ地方のスライド等を公開し、多くの人々を魅了し啓蒙した。今西・西堀等の中学時代の話である。その後この石崎との接触はなくなるが、やや間をおいて、ヒマラヤの夢を第二段階的に育ててくれた田中喜左衛門との接触が始まるがこれは後の話にしよう。

× × × ×

その前に、この頃の京都の登山界に目を向けてみよう。今西・西堀等の中学時代、京都には二つの登山グループがあった。一中派と二中派である。二中派というのは当時の京二中の校長中山再次郎を中心とし、田中喜左衛門・中野忠八といった面々でつくられていた。中山再次郎の前身はスキーの発祥地高田のある中学の校長であった。彼はレルヒにスキーを学びそれをよくしたが、京都に赴任するにあたり、高田を去っては当分スキーを出来ぬことを嘆いたという。然るに赴任途次車中より、たまたま朝日に輝やく白雪の伊吹を眺め、ハタと膝を打ち、二中に赴任するや否や当時学校のPTA会長の様な仕事をしていた田中喜左衛門、当時のボーイスカウト会長の中野忠八と語り、ここに関西スキークラブなるものを結成した。これが二中派と呼ばれるものの基である。

一方、一中には当時一中山岳部の中に青葉会なる一団のグループがあった。これは今西等約十人の同級の友のグループで、一中山岳部の中でもアクティブなグループであった。そもそも一中に登山の新風を吹き込んだのは金井千仞という当時の一中教官であった。彼は塩尻の人で日夜アルプスの雄姿に接し、一中赴任後も何とかこれを紹介したいと願ひ、ここに一中山岳部を創設し、初めての日本アルプス入りをした。大正三年今西等の中学三年時代であった。これよりさき一中には加納一郎等の優れたその方面の先輩が居たが、残念なことに彼等の時代には機未だ熟さず、組織をつくるまでには至らず、その数年後になってやっとこの金井千仞によってオルガニゼーションが作られたのであった。

× × × ×

さてこの青葉会十人程のメンバーの中に、藤枝某なる人物が居た。この十人中三人まではその後北大に進み、藤枝も北大に進んだが残念なことに、ニセコのスキー合宿で眼をストックで突くという事故をひき起して早逝した。この藤枝の兄が慶応ボーイであった。当時慶応はスキーの輸入期にあり、山岳部員の否を問わず百人に近い大世帯で、関にスキー合宿をもっていた

という。藤枝もその慶応ボーイの兄に連れられ関に行ったのが始まりでスキーを覚え、藤枝と仲の良かった西堀が直ちにこれを取り入れた。当時今西はスキーに対しては冷淡で、山は足で登るものであり、そんなスベリ台の様な板で山をスベリ下りる等とは山を冒瀆するも甚だしい等といってスキーを見向きもしなかったが、大島亮吉の白馬スキー登山のニュースを聞いて覚然とし、これからの冬期登山はスキー無くしては為し得ない事を悟ったという。

× × × ×

こういう訳で西堀は今西等より早くスキーを始め、やがて中山再次郎の関西スキークラブに入会する。ここに彼等の中野忠八等との交友が始まり、田中喜左衛門の登場となる。田中喜左衛門は京都の七条大宮に居をもち相当に裕福であった。二中を出たあとすぐに家業についたが、当時すでに Alpine Journal 全巻をもち、且それに精通していた。彼がどの様にしてそうしたものに興味をもち始めたかは正確には不明にしても、当時の関西の古い日本山岳会加賀正太郎との交友のあったことは、多分の示唆を含んで居るかも知れない。しかし、それにもまして友人中野忠八の影響が大きく考えられると思う。つまり前に述べたが、中野忠八は当時のボーイスカウトの会長であり(その実弟久留島秀三郎は現ボーイスカウト理事長)、「ボーイスカウト」といえば「自然に親しむ」そして即ち「山」という風に結びつけて考えられるので、彼との交友関係が田中喜左衛門をして、山に興味をいだかせる直接の原因の一つとなったことは想像に難くない。それはさておき、田中はその人間の魅力、世界の山々に対する知識の豊富さもさることながら、何より骨のあるところは当時にして既に一つの登山思想をもっていた事であった。彼は Alpine Journal を通じて海外の山の事情に精通していたが、当時としては流行児であった欧州アルプスには大した興味をいだかず、寧ろコーカサスそして漸くその頃 Journal 上に散見しだしたヒマラヤなる地域に興味をいだいていた。それは或る云い方をすれば、当時日本の山岳界を支配していた「宮廷登山」に対する、田中の一種のレジスタンスかも知れない。とにかくこうして田中喜左衛門との接触は、彼等をして海外山岳界への蒙を開き、海外遠征への熱を持たしめる直接の一つの原因となった。

× × × ×

やがて今西達は一中を終え三高に入学した。三高でのこうした活動の基となるのはその活動の場としての「Room」である。中学時代彼等の頭の中でモヤモヤしていたものは、この三高時代にはっきりとした一つの思想へと発展してゆく。その後もそうだが、京都には良い面が一つある。そ

れは京都とは云っても決して一つの派閥でこりかたまない事である。そして同じ思想、一つの共通点をもらつ者なら誰でもそれと融和し、そして混成していったことである。

これはその後の京大旅行部となってもそうだが、如何なる血筋でも純粋の血統からは稀には天才も生まれるが、大体に於て劣等児が多い。それよりも、雑種・混種の優秀さはこの世の多くの例がそれを証明している。京都の強みはこの雑種の強さである。

さてこの Room で将来の Kern が培われる。Room の生活は、三中より高橋健治が加わり、二中よりは田中欽二が加わり雑種の強みを増してゆく。

これより先、京一中時代、今西等をして夢中にせしめた、いわば聖典の如き書物が一つあった。それは「山岳旅行秘決」という。紫陽道人なる人の著である。バラバラと頁をめくってみる。曰く

- 入身小太刀の構えて丸木橋を渡る術
- 燕返ししの術で河をとび渡る方法
- 鍋釜なくして飯を炊く方法
- 雨中に薪をもやす方法
- 一足千里をゆくワラジを作る秘決
- 一昼夜保つ(薪松)をつくる方法

等々と書き出せば限りがない。一見仙人術めいて、一寸どうかとも思うが著者は相当な教養のある人で、それに著者自身の体験も織込んであり、読むと一々尤もであり科学的にも納得出来、当今そこらに出ている馳出しの若い登山家の登山技術書等は足下にも及ばぬ位の Appeal を感じさせる本である。彼等はこれを中学時代精読した。これで終れば彼等の登山もいわば「術」で終ってしまうのだが、三高に入って彼等の前にあの「Mountain Craft」なる本が現われた。Room に於て毎日々々これについて議論がわいた事は云うまでもない。こうして片や紫陽道人、片や Mountain Craft この二つの結びつきがその後の彼等の登山観、登山思想を確かなものにしたものの一つであることは疑う余地がない。それは丁度明治の初期の柔術から、柔道への発展にも似ている。柔術の古い技術を認めつつも、新しい西欧の思想を取り入れ柔術を柔道へと発展させていった加納治五郎の努力にも似ていた。

こうして三高時代、雑種混成を加えつつ、そして思想的にもまとまったものをもちつつやがて彼等は京大へと進む。

—— 第一稿終り ——



チョゴリザ以後の AACK

平井一正

1958年8月4日 AACK創設以来の夢をチョゴリザに結んで以来三年、AACKの動きは全くサルトロカンリ計画というもつれた糸のまわりを三転四転する糸だまのようなものであった。関係者一同の努力の末、ようやくこのもつれた糸もときほぐされて、サルトロカンリ遠征が三年ごしに実現できるようになったことはよろこびにたえない。

× ×

チョゴリザからの帰途において、すでに次回遠征の目的はサルトロと、皆の気持は一致していた。それはチョゴリザから眺めたサルトロ・カンリの魅力に加えて、われわれの心の中にはかなり以前からサルトロへの執念があったからである。サルトロを囲むアチエン流域が、ヒマラヤに残された唯一のユートピアといった憧れもあり、チョゴリザの経験を生かしてサルトロをうちとることが、むしろ当然のようにわれわれは思っていた。そのようなことからチョゴリザ隊の最後の二隊員の帰国を待って、僅か3カ月たった1959年2月下旬に1960年度のサルトロ・カンリ遠征許可申請書が、在東京パキスタン大使館に呈出されるはこびとなったのだが、そのスピードにそう驚くにはあたらない。われわれは当然許可がおりるものと信じて四手井隊長以下その準備にかかり、計画はかなり進行した。ところが11月下旬、在日パ大使館より、パ国外務省は中共との国境紛争に関連し、1960年度のサルトロ遠征は不許可との通知をうけ、関係者一同はすっかり当惑してしまった。緊急理事会が開催されサルトロ計画は1年延期ということにおちついたが、おちつかないのは若手だけで組織している木曜会であった。このまま1年を待つよりは小パーティでもいいから出したとの意向のもとに、ヒンズークシュのノジャックという山を「山日記」からさがしだし、この山をアフガニスタン側から偵察しようということに決定し、事は迅速になされた。サルトロが断られてから1カ月た

ずの12月のくれ、バミール遠征許可願が在日アフガニスタン大使館に呈出された。1960年3月になって隊長は酒戸弥二郎に決定、4月末、入国許可があり、5月と6月にわけて隊長以下吉井・沢田・広瀬・酒井・岩坪の6名が出発した。そして彼等は見事にノジャック(7490m)の登頂に成功し、サルトロの落し子というには余りにも大きな成果をあげた。

一方、1961年度のサルトロ許可願はノジャック隊に関係なく、前年と全く同様3月下旬在日大使館に呈出した(バ国政府のとりきめて許可申請は前年の6月末までとなっている)。つまり、今年度はノジャックの偵察(登頂の可能性は少いと見ていた)来年はサルトロ、そして再来年再びノジャックをねらうという、今から思えばノンビリしたことを考えていたのだ。しかし今度もサルトロ計画は流産の憂き目にあった。すなわち5月中旬、在日大使館より1961年度のサルトロ登山は許可できない。理由は前年と同様との通知をうけた。度重なる拒絶をうけて国境関係以外の理由があるのでないかの疑いを固くしたが時はすでにおそかった。ともかくサルトロについては来年は諦め、6月末までの申請期間を利用してパキスタン側からのノジャック登山、およびその附近一帯の学術調査申請願が時を移さず再び在日大使館に呈出された。そして準備態勢はアフガニスタン側かパキスタン側か、ともかくノジャックを来年年ということと固まった。ところがノジャックは登られてしまった。喜びの中にもいささか当惑したACKの若手は来年の目標を急遽決定しなければならなかった。ネパールに転進も考えられ、カンジロバヒマールも話題にのぼったが結局固まらず、また酒戸隊長の帰国後スライドで見たノジャック附近の7000m級の山に若手だけで小遠征をするという案もでたが、これが具体的になる前にそれは梅棹忠夫の発案になる、大阪市大・京大合同のビルマの最高峰カカロポラジ登頂、および学術探検計画に吸収され、ここにACKは明年春にビルマに遠征すること決定した。12月下旬申請書をビルマ大使館に呈出し、計画は新聞紙上にも発表され準備もかなり進んだが、1961年1月下旬ビルマ大使館より遠征は国境関係で許可できないとの報に接し、ここに再びACKは苦渋をなめさせられた。

ビルマ計画に先立って1960年2月アフガニスタンからソ連に入り、昔のシルクロードを自動車で踏査する計画が梅棹忠夫と若手の若干でたてられ、ソ大使館に計画書が呈出されたがこれは全くなしのつぶてに終わった。こちらもただかく打診の気持であった。

さて、1961年は早々からビルマ計画の後始末という芳しからぬことがあったが、その後の常任理事会、および木曜会の討論の結果、来年は再びサルトロ遠征を考える。そして今年はその許可取りつけの為の準備に

努力するという結論に達した。まず以前から考えていた、日パ合同登山隊という形をもってゆく手段を検討した。これはここ2、3年の外国遠征隊の動向がそうであるからである。そのため昨年マッシュャブルムに登ったアメリカ・パキスタン合同遠征隊のパキスタン側隊員、アクターとコンタクトし合同登山の意志の有無をきいた(3月)。このあたりから話は全く複雑になってくる。アタターからの返事は個人的にだが、是非一諸に行きたいとの意向を伝えた。これに先立って3月下旬再びサルトロ登山申請書を在日大使館に呈出し、同時に外務省情報文化局長に許可の可能性について問い合わせた。4月下旬在日大使館は外務省はあいかわらず不許可の方針である旨伝えてきた。サルトロ不許可の場合を考えていたわれわれはバルトロ流域の、ガッシャブルムIII峯(7925m)、ヒスパー流域のクンヤンキッシュ(7852m)をあらためて検討した。そしてこの三つの山のいずれか一つの許可取りつけを交渉するために、高村泰雄が6月の初めカラチ向けに出発した。その後の高村の活躍は別項「高村通信」にみられるように誠にはなばなしのものであり、彼の努力によって日パ合同サルトロ遠征も実現する可能性が見えてきた。彼の出発後の経過を簡単に記す。

パキスタンに飛んだ高村の指示により、6月15日ガッシャブルムIIIとクンヤンキッシュの申請書をパ大使館に呈出。さらにつづいて6月30日、高村とカラコルムクラブの会長ベグ教授の話し合いからサルトロ・カンリが再び復活し日パ合同サルトロ遠征申請書をパ大使館に呈出。その後現地の交渉が進み8月、四手井教授が渡パ、カラコルムクラブとの正式合同遠征をとりきめて教授は一人9月帰国。その後も許可はなかなかおらず、現地の高村をヤキモキさせたが、古内大使の努力の結果、11月の池田首相の訪パの際、アユブ・カーンバ国大統領の会談でサルトロの話が出たことからこの問題は一きょに解決。バ国外務省より12月2日付の正式の許可書ももらい、高村は勇躍帰国。ここにサルトロ・カンリの許可とりつけは成功し、ACKは30周年記念事業として1962年にサルトロ・カンリをうちとるべく一步をふみだしたのである。

カラコラム登山の可能性についての一考察

岩坪五郎

山は人間のようにつぎつぎと生れない以上、処女峯は登ればへるのは当然である。かってヒマラヤにはまだ無数の処女峯がまっているなどいわれた。それがも

う通用しないのは、昨年成功したノジャックについての世界あちこちからの問い合わせが、口を揃えている。

一ええ山を見つけたなあ。わしらもいきたい。もう近所にええのは残ってへんか。一からも明らかである。

手近かな山がなくなって、奥へ奥へとたずね歩くと、国境地帯にぶつかる。ここは政府の神経がわりあいかたまっているところだから、むつかしいことがおこってくる。痛い所を無用の奴にさわられたくないからである。

わたしがこれから一筆せんとするのは、西パキスタン国カラコルム・ヒンズークシ地帯における神経分布の推理図である。神経分布図だから、時間空間を超えて一定しているということはない。厳格には、そのときどき本人にさわってもらって、痛いか痛くないかきくべきである。

これを今までの記録と高村通信を基に、想像をたくましくせんとするのだから、当たれば幸運といわねばならない。とくに、この国は神経質といおうか、例外や特例がすぎだから。神経に例えた以上、それに何でもってさわるのかを考える必要がある。名前をきいただけでビリビリするものもあるし、目の中へ入れても痛くないものもあるから、これを分類する。ただし、あくまでスポーツ・アルピニズムにたつてのものである。

いちばん痛くないもの。いうまでもなく自分自身である。即ち自国民だけの登山隊である。しかしバ国ではまだこの実力が不足で、注目すべきものは現れていない(しかしインドではインド隊がサセルカンリの偵察にレエをあとにでかけたという。今の情勢ではわたしたちには許可がとれるとは考えられぬ地域である。)

二ばんめによいもの。バ国との合同である。パキスタンの富士山といわれた(?)ラカポンはパ英陸軍の合同隊だし、ヒドゥンピーク、マッシュャブルムをやったアメリカのクリンチはパ陸軍若手将校を、有力な山仲間としてもっている。アクター大尉は後者の第二登に成功した。京都大学とカラコラム・クラブとの関係もそのひとつといえるだろう。

三ばんめは外国人だけのメンバー、または外国人主催の隊ではあるが、いいコネをもっているもの。たとえば1959年バツラで遭難したイギリス隊、昨年のK12の連合隊などがある。反英的気分があるとはしても、やはり英国とのいままでの関係は深い。言葉がそのまま伝わるかどうかの差もある。だいたい英語をよく話すものが多い隊は、リエゾン・オフィサーとうまくいっているようである。

四ばんめはパキスタンと同じ陣営に属する諸国家の登山隊である。それでも、その国家間の状態や、以前のその国の隊の行状などにより、そうとうかわってくるだろう。

このように書きならべると、なんのコネもなく、全く表玄関からの申し込みはさわめて許可取付の可能性がすくないようにみえる。しかし、カラコラムの登はん歴をみれば、オーストリア、ドイツがずらりと顔をならべている。パキスタンのパスは圧倒的にベンツが多いとしても、オーストリアがとくにバ国と深い関係をもっているとはおもえない。あるいは今まで山がたくさんあったので、その当時は余り有名でない山にばかり登ったのかもしれない。このようにかんぐれば、ヒドゥンの横のGII、K2の横のブロード、ラカポンのそばのハラモン、一見どこが頂上か分らない、ディスティギルサルなど妙な山ばかりである。

だがへんにひねくれなければ、決してクーリーに人気のあるとはおもえぬ、オーストリア隊がつつぎと輝かしい歴史を作っているのはとくに局部、急所にふれぬかぎり健全な神経なのかもしれない。しかし、この健全な神経も日本的ケツベキさをもってはかれれば、どうなるか分らないが。

五ばんめにまことに不幸な現実であるが、とうてい登山隊の入国許可を得られない人たちがいる。パキスタンと陣営を異にする国の登山家たちである。ノジャックであったポーランドの隊員はなげいていた。「コミュニストだ、コミュニストだといって登らせてくれない。おれたちは『ヌアー・ベルグシュタイガー』として頼んでいるのに」しかし、平井や酒井が交通している男に東独のリヒター氏なる人がいる。かれはチェゴリザのI峯とII峯のどちらが高いかに、大きな関心をもっている。東独の人がカラコラムに興味をもつのはあるいはかれらも許可を得る可能性がでてきたのだろうか。

つぎに実際に痛いか、痛くないかを発表する人たちすなわち、許可証発行のお役所について。申請書は現行の規則では前年の6月末までに、こまかい項目を書いて在外バ国大使館にだすことになっている。正書、副書実に十部である。返事ははやければ同年十一月、チェゴリザは一月末。ティサッチミール東峯をことし狙ったノルウエー隊は、今春出発を前に不許可の通知をもらったという。カラチへついでから断われたものなどいろいろ変化に富んでいる。こんなに今まで苦勞したのに、いまごろなんだなどというのはこちらの勝手であろう。

申請書を審議許可する役所の名前、構造、相互間の関係だが、高村らの努力にもかかわらずまだはっきりしない。わかっているところは大使館、外務省、国防省、G・H・Q(これは国防省の下にある)カンミール省、ギルギット、スカルドゥのP・AとA・P・Aチトラール地域では西北辺境省、学術が入っているときには文部省とその傘下の諸官庁が関係し、そこから連絡将校がくることもある。

実際に現地の情勢を判断して、せわをするのはカンミール省(カラコラムのばあい)と、その下のギルギットまたはスカルドだが国境地帯では国防省GHQが、ぐっと睨みをきかせている。「2年前どここの隊は、ここへ行った」といっても、「今は2年前ではない。事態はだんだん深刻化している」で一蹴される。この言いかたはお役所に限らず、街かどで物を値ぎるときにもよくきかされるが。

不許可の理由など、外交文書でくるのだから聞かせてもらってもしかたないが、こちらの憶測を加えるといろいろある。一国境に近いから。どこが国境か明確に分らないので、甚だ勝手悪い。しかしこの理由が最近はいちばん多い。一つはトライバル・テリトリーだから、1956年までのスワート地域。現在もそうかも知れない、インダス・コヒスタンなどそれに入るだろう。チトラールと、ベンジャワールの間にある、ディール藩侯国は毎日新聞の小西記者の報告では、アフガニスタン・パキスタン両国間紛争の中心地となったという。ことしノルウェー隊が、再びティリッチ・ミールII峰を狙ったが、出発直前不許可となったのはそれが原因なのかもしれない。ティリッチ・ミールは明らかに、パ国領内だし1959年フォスコ・マライーニのイタリヤ隊はサラグラールに登っているのだから。

それでは次に、実際に地図上で地域的にあたってみる。どれくらい真実がきわめてあやしいけれども、一考察と称するゆえんである。

ラワルピンディから飛行機でスカルドに向う。この飛行機はパンジャブ・ヒマラヤの、とくにナンガ・パルバット附近の天候が悪ければ、全く不通となるから、もし十人以上のパーティなら、全員スカルド集結に二週間は見ておくのが無難である。たちまち6000m近い雪山の連なりにぶちあたるが、目前にそびえるナンガに目をうばわれてしまう。しかしパブサル峠附近の雪山を二、三人の気楽な仲間たちと試登するのは楽しかろう。

左手にラカボンとハラモンがみえる。これらも、1958年英・パ陸軍連合隊とオーストリア隊に登られてしまった。

スカルドでジープをやとって、東へインダス河をさかのぼる。早朝出発すれば、ゴルの東方でシヨーク川に入り、昼すぎにはカバルにつく。この間、昔はブルジ・ラ、ゾージ・ラを経て、カラコラム入りの古えの道がある。今はごく近くに不明確な印パ国境があり、これといった山もないからまっすぐ進むことにする。カバルでシヨーク川を渡り、サルトロ川に入る。北からフーシェ谷が入っている。この突きあたりにマッシュャーブルムがあるが、昨年クリンチのアメリカ隊(パキスタンメンバーを含む)によって登られた。フーシェの人たちは強くて、まじめで頭がよいと自慢してい

る。チョゴリザ隊もフーシェ出の男たちを高地人夫に使用した。わりあいよさそうである。

たいてい許可のとれる所を第一地帯、うまくやればとれる所を第二地帯、まず不可能な所を第三地帯としよう。タリー谷・フーシェ谷は第一地帯といえるだろう。

さらに東へ進んでダンサムに、北からコンダス谷が入っている。この谷から、そろそろ第二地帯が顔を出し始めてくる。チョゴリザからの尾根が南下しているバルティスタン・ピーク(7280m)には、ことし英空軍の大尉を隊長とするパーティが入ったが、登頂はできなかった。コンダス氷河をつめて、ことしオーストリア隊がゲント(7200m)に登頂した。ゲントはチョゴリザからいつもうち眺めて、すでにAACKに所属するかの如くおもっていた山である。そうとうなシヨックであった。それに私の分類においても、この山に許可がでたことは、はなはだ問題である。中印国境に対してはサルトロと殆んど条件を異にしない。まだその正式報告はしらないが、もしコンダス氷河からシア・ラをこえてシアチェン氷河に入り、東面から登ったとすれば、呆気にとられざるを得ない。

しかし、かれらは同時に、ジェルピ・カンリの許可をえていた。ゲント、サルトロとともに、第二地帯に入る山である。ゲントに登ったオーストリア隊はとうぜん余勢をかけて、ジェルピ・カンリに向かうとおもわれた。しかるにかれらはそのまま引き返してしまった。カラチからのニュースによれば、かれらはやはり向おうとはしたが、ルートとしてはジェルピ・カンリ氷河から入る必要があり、このルートはパキスタンの連絡将校から拒否されたのだという。やはりパキスタン政府は一応筋を通したわけである。

したがって、ジェルピ・カンリ氷河に入ったのは1958年のハント以来、外国人としてはことし偵察に向った、わが高村泰雄のみである(注、カラコラムの今西隊でおなじみのアスラム大尉は入ったらしい)。オーストリア隊の例からみて、ジェルピ・カンリ氷河は当然第二地帯に入れるべきである。高村は四か月のパキスタン滞在で、一種の地元の玄人となっている男だから。だがオーストリア隊のゲント許可はサルトロ・カンリ遠征許可に大きな手がかりと希望を与えた。ついでダンサム川をのぼり、ゴマを経て、ビラホンド氷河をつめる。このあたりの歴史は酒井の文に精しいから省略する。昨年のオーストリア、イギリス、アメリカ混成隊が始めの文言に似合わず、僅かにビラボンド氷河からK12の偵察に終ったのは政治力だけでは山登りはできないことを明らかにした。

あこがれのシアチェン氷河に入る。左岸にはテラム・カンリはじめ、テラムシエール氷河、リモ氷河、アスパラサス山群と、わたしたちの胸をときめかす地域

だ。だが現状ではシアチェン氷河以東は第三地帯とみるべきだろう。

シア・カンリの横コンウエイサドルをこえてバルトロ氷河に入る。ガッシュャーブルム連山にはIII峰(7925m)がある。現在ゴサインタンを除けば世界最高の末踏峯である。IV, フアルチャンカンリをこえて、K2までにスキャン・カンリ(7544m)がある。ヴィットリオ・セラのきれいな写真でおなじみ。続いて西へK2, ムスタグ・タワー、パイユとかつてはカラコラム銀座をつくっていたところである。昨年アメリカ隊がK2を狙って失敗しているが、高村情報ではこの地域も、シンキャンに近いとの理由で、むつかしくなっているらしい。この連山以北は問題なしに、第三地帯、連山そのものは第二地帯となろう。

ピアフォ氷河のツングの手前、吊橋で有名なデュモルド川をさかのぼるとパンマー氷河がある。奥の院は広くオーグル(レ?) (7285m)を始め、7000そここの山がぐるりととりまいている。ここも小人数のパーティに魅力を感じさせる場所である。この山脈の北は第三地帯である。オーグルも許可困難かと思われたが、若いアメリカ人を隊長とするピアフォ氷河学術調査隊(越冬予定)は、許可をとっているといい、高村を悲しませた。この隊にはベグ教授が連絡将校として、参加している。ひどい混成部隊で、学術調査が主目的だからたぶん登れないだろう。

スキーを志す者のあこがれの地、スノウ・レークからクルドピン氷河、シムジャールを経て、バツラ氷河の入口に至るルートは、1955年今西隊が進まんとしたが、さえぎられた。今ではとうてい望むべくもなく、カンジュート・サール、トリボールの連山から北を第三地帯とすべきだろう。

このヒスパー氷河の北側の連山は今まで多くの人たちが、通ったにかかわらず、そうとう高い末登峰が残っている。カンジュート・サールはすでにおち、昨年オーストリア隊にディスティギル・サール、イギリス隊(ノイス)にトリボールは登られた。しかし、クンヤン・キッシュ(7852m)、ユクシン・サール(7600m)、モムヒル・サール(7200m)などは健在である。前者はことしラホルのクライマーズ・クラブが偵察に行ったが、余り実力のあるクラブではないらしい。

ヒスパー氷河の南側、チョゴルソマ氷河をとりまく山々は7000mには満たないが興味をひく所である。ティリッチ・ミール隊に同行して、はじめて山登りをしていらい、俄然、山けづいた、ストレーザー大尉がハラモンに失敗して、次に再びティリッチ・ミール周辺を狙った。主にパ陸軍の将校たちをひきいたが、不許可になったのち、この氷河をそうとう荒しまわったらしい。

世界の桃源郷として有名になつた、フンザ、ナガール

だが、ことしのフンザはやけに警戒厳重で、とうてい入れそうになかった。しかるに、どうした事態の変化か八月頃から急に許可になり、大使館で高村がひじょうにお世話になっている牧内氏も、宮田某女史とともに旅行されてきたという。登山隊は入れても、外交官の辺地旅行は普通たいへん困難なものである。オックスフォード、ケンブリッジの女性を交えたパーティは時期が早かったので、フンザに入れず、ぎりぎりのミナピン氷河をさまよったらしい。学術調査が主目的であったという。ミナピン・ピーク(ディラン)は7233mである。これらは四手井先生から伺ったものである。

このようなフンザ事情の好転から、あるいは第三地帯にすべきかとおもわれた、バツラ氷河も第二、五地帯に入れる。バツラ氷河には1955年ドイツ・オーストリア隊が科学、登山隊をだし、1959年イギリス隊が四人遭難した。20日におよぶ悪天候の結果である。イギリス隊もカラチでなお許可を得られなかったが、隊員に特別のコネがあったらしい。バツラ氷河は兩岸切れおち、その山群への登はんは、ひじょうにむつかしうだが、末登峰の宝庫ともいうべきだ。バツラ主峰(7785m)、II峰(7610m)、カンピレ・ディオール(7100m)などがならんでいる。ティルマンはギルギット・フンザからバツラの入口をかすめて、ミンタカ峠より、シンキャンに入りワクシル峠より、ワハンをくだったが、現況では絶望的である。

ギルギットより西、ヒンズー山系は56藤田隊、57年松下隊が歩きまわっているが、あまり高い山はないので、登山隊も少く現状ははつきりしない。ラワルピンディなどに、「ヤシンで雪山を眺めながら、夏休みを！」などのポスターがあるというから、わりあい簡単なのだろう。

問題となるのはバツラの反対側のカランバール氷河、ダルコット峠とバロギル峠の間のチャン・タール氷河とティリッチ・ミール周辺の山々であろう。ここにはノジャックへの途上眺めた双子峯など、7000m前後の山があるが、59年マライーニ隊のサラグラール登頂後許可をとった隊はない。さらに今パキスタンとアフガニスタンは国交断絶状態にあるから、チトラールを経由の登山は不可能かもしれない。前にもふれたインダス・コヒスタンには高い山はないが、精力的に遠征報告を集めた。シェパインフルツの植生図にも空白のまま残っている。

これでお粗末ながら、カラコラム・ヒンズークシを一周リレベジャワールに戻ってきたことになる。

11月10日

水曜講座 —その1—

サルトロ・カンリ小史

酒井敏明

☆この講座は毎水曜日夜AACKルームに於て、主として若手を相手に講ぜられた講義に手を加えたものである。

カラコラムの雄峯 Saltoro Kangri (7742m) がわれわれの会の遠征計画の目標となってからかなり久しい。現在この計画の実現に対する努力は執拗に続けられているのだが、それはさておき、ここでサルトロ・カンリ地域における各国遠征隊の活動を歴史的にふりかえてみることは、必ずしも無駄ではないであろう。

× ×

1. 位置, 名称, 標高その他

カラコラムは、かつては広義のヒマラヤに含まれるものとして考えられたこともあるが、現在ではインダス河がこの二大山系を分かつものとされている。サルトロ・カンリはこのカラコラムの東南隅に近く、小カラコラム山系のサルトロ山脈上に位置し(北緯 35°24' 01", 東経 76°50'55"), インダス河の支流ショーク川のその又支流のコンダス川が西面を、ヌブラ川に注ぐシアチェン氷河が東面を流れている。インド測量局ではこの山を K 12 の記号で呼んでいた。クォータインチャップの 52 A 図幅ではピーク 36 とあらわされているが、ケニス・メイスンはサルトロ・カラコラムの最高峯であるから、これをサルトロ・カンリ第1峯と呼ぶべきであると提唱し、この名が普通に用いられている。標高は海拔 25400 ft, すなわち 7742 m と定められている。

高度 7742 m といえば、世界で第 40 位くらいの高峯に数えられるが、カラコラムだけを考えれば第 14 位、カラコラムの処女峯の中では、ガッシャーブルム III (7925 m), クンヤンキッシュ (7824 m) パツラ I (7785 m) に次いで第 4 位を占めることになる。

バルトロの南東の端に位置するシア・カンリにはじまり南東走するサルトロ山脈は、途中でシェルピ・カンリをおこしてから徐々に高度を増し、サルトロ・カンリ第2峯(7705 m), 続いて 1 km も離れずに並ぶ第1峯で最高点をなし、高度を減じて南南東にのびる。山脈の西面はコンダス川の水源をなすシェルピ・カンリ氷河とその支流へみごとに切れ落ちて可能なルートは発見できない。第1峯の頂上から東へのびる岩尾根はシアチェンの支流ピーク 36 氷河へ絶壁を落としていく。主脈を頂上から 1.5 km ほど南へくだったとこ

ろから、急傾斜の雪稜が南東へのびている。これこそ可能なルートを提供する唯一のものであって、のちののべのように 1935 年のイギリス隊はこの南東尾根によって登頂を試み、7470 m まで達しながら、悪天候にはばまれて惜しくも長蛇を逸した。本格的な登山を試みたのはただ、このイギリス隊があるのみで、先にもあとにも登高の記録は他にみられない。しかしカラコラムでもっとも大きなシアチェン氷河は、また極地を除いた山岳氷河としてはパミールのフェドチェンコ氷河(約 80 km)について長大なものとして知られ、多くの探検家が活躍する舞台となったのであるから、しばらくサルトロ・カンリを離れて、シアチェン氷河探検史をふりかえてみよう。

2. ロングスタッフの発見

ショーク川の支流ヌブラ川の水源をなすシアチェン氷河は、バルトロ氷河のいちばん奥に位置するシア・カンリの東面に発し、東南東にのびる大カラコラム山脈と南南東にのびるサルトロ山脈にはさまれる広大な地域に降り積もる莫大な量の雪を集めて南東流し、全長約 47 マイル(約 75 km)を有する大氷河である。テラムシェール, ピーク 36, ロロフォンド, K 12 などの大きな枝氷河がある。

このシアチェン氷河をはじめて世に紹介した功績は、イギリスのロングスタッフに帰せられている。ヤングハズバンドが 1889 年 シャクスガム川の一流をなす、ウルドゥック氷河をつめて、カラコラム主脈上のひとつのゴルに達したことがある。ロングスタッフはサルトロ・パス(別名ビラフォンド・ラ)を越して、ヤングハズバンド・サドルにまで達し、当時空白地域として残されていたこの地を探検するために、1909 年 モーリス・スリングスピーとアーサー・ニューの二人をともなってやってきた。ゴマ部落からビラフォンド氷河にはいり、7 月 15 日に峠(5550 m)を越してロロフォンド氷河に踏みこんだ。かれらはこのときはじめて無名の大氷河を発見したのである。市 3 マイル以上、長さは合流点からみえる範囲だけでも 25 マイルはあるこの氷河が、南東流したのちに北へ折れてヤルカンド流域にはいるのか、あるいはヌブラ川に注いでインダス流域にはいるのか。要するに大カラコラム山

系の北か南か、どちらへ流れているものなのか。多大の日数を要するこの氷河の探検には準備が不足していたので、ロングスタッフは合流点に一日滞在して、テラム・カンリの名を与えた、氷河北岸の高峯を測定しただけで往路をとってかえし、チェルン・ラを越してショーク川に出た。サセル峠やカラコラム峠を訪れたのち、かれはヌブラ川をつめ、9 月 18 日ヌブラ川源流の氷河を末端から 10 マイルも登ったのちに、二カ月前にその中流部をみた氷河と同一の氷河であることをみぎわめることができた。氷河末端部に近い牧地の名をとってシアチェン(バラ)氷河と呼ばれるこの氷河は、その中流部でテラムと呼ばれるものと同一物であり、長さは 47 マイルに達することが、かくしてロングスタッフによって報告されることになったのである。

3. ワークマン夫妻の探検

ロングスタッフの発見のあとをうけてシアチェン氷河に登場するのは、ガルワールからカラコラムにかけての数回の大規模な探検行によって著名な、アメリカのワークマン夫妻であった。ウィリアム・ハンター・ワークマン博士とファニー・パロック・ワークマンの夫妻は 1912 年 7 月中旬にビラフォンド峠を越してシアチェンにはいった。かれらは以前の遠征以来の仲間である、アルプスのガイドを 3 名つれてきた。前年の 8 月に短期間滞在したロロフォンド氷河の合流点にベースをつくり、シアチェンの源流部、ピーク 36 氷河、テラムシェール氷河などの支流をも、探検してくわしい地図を作製した夫妻は、シア・ラを越してコンダス氷河をくだり、8 月下旬カバルの部落に出ている。測量技師のピータキンはシアチェン流域の高峯群の位置と高度とを測定し、夫妻はシャクスガムとの分水嶺上にあるインディラ・コルとトルキスタン・ラの二つのゴルに達し、ビラフォンド・ラの近くの Towitz 峯に初登頂し、またゲントを命名している。サルトロ・カンリの東麓をなすピーク 36 盆地を探検して、この山を北東および南西からくわしく偵察し、試登を行なって約 6000 m に到達した。ワークマン夫妻の探検行はそれまでもに幾つか数えられるが、公刊された記録や地図が不正確だというので評判は悪いのだけれども、このシアチェン探検については「この遠征が成しとげた業績は、ワークマン夫妻の以前の冒険行のそれとは全くことなる性質のものである」と、メイスンも高く評価している。

1913 年から 14 年にかけておこなわれた、デ・フィリッピを隊長とするイタリアの学術調査隊は、シアチェンより更に東のデプサン高原や、ショークおよびシャクスガムの両河の源流域を探検したもので、第一次大戦の勃発によって早くきりあげざるを得なかった。この隊は測地、地質、気候などの専門家を多勢擁し、

その学術的成果もめざましかったが、シアチェンに直接踏みこんではいないのでここには割愛する。

4. ダイネリのライト・エクスペディション

デ・フィリッピの東部カラコラム探検に参加した、イタリアの地質学者ジョット・ダイネリは 1930 年の 6 月中旬にシアチェン氷河にはいった。同行は著名なスキーヤー、エレン・カラウ廉である。ゴマから 57 人のクーリーをやとって食糧をもちこみ、テラムシェール氷河の出合いに根拠地をつくったダイネリは、約 2 カ月にわたり、シアチェン氷河の源流から末端まで、地質と植物の調査をおこなった。おわって、かれらはテラムシェール氷河をのぼってイタリア人のゴルに達し、反対側のリモ氷河にくだった。かくして、1913~14 年のイタリア隊の調査地域と、シアチェン地域とを結びつけることに成功したのである。

イタリアという国はよほどカラコラムがお得意なのだろう。1909 年バルトロ入りをしたアブルツェ公は、K 2 の偵察とチョゴリザの試登をおこない、当時としては破天荒の登高記録である 7498 m に到達している。第 2 回目がフィリッピの率いる東部カラコラム探検隊、第 3 回目はこれもおおがかりな 1929 年のスポレット公のバルトロ遠征隊であって、バルトロ氷河をくまなく探検したほかに、東ムスタグ峠からシャクスガム流域にはいり、サルボ・ラゴ氷河からテラムカンリ北側のキャガール氷河まで遡行し、さらにウルドゥック氷河をつめて、インディラ・コルの直下までトレイスしている。翌年のダイネリのシアチェンとリモの探検更に、戦後になると、1954 年のデジオの K 2, 1958 年のカッシンのガッシャーブルム IV の両巨峯の初登頂に成功しているというぐあいだ。

シアチェンもワークマンとダイネリの調査によってかなりの部分が明きらかにされたわけであるが、次には純粹の登山隊がサルトロ・カンリに挑戦することになる。1935 年のイギリス隊である。

5. ウォーラとハントの登山隊

インドに勤務していた 4 人のイギリス軍人が、1935 年の夏に休暇を利用して小パーティで試みる登山の目標にえらんだのがこのサルトロ・カンリである。ジェイムズ・ウォーラ、ジョン・ハント、ローランド・ブラザーフッド、J・S・カースローの面々で、費用はもちろん自分たちで出しあったのである。信頼できるシェルパを 2 人、ダワ・トンデューブとパルデンをつれていった。2 人とも前々年の 1933 年ラトレッジの第 4 次エヴェレスト隊に参加し、つづいて 1934 年にはメルクルのナンガバルバート隊、すなわち 7480 m の第 8 キャンプまでつくりながら暴風雪にはばまれ、退却の途中メルクルをはじめヴェルツェンバッハ、ウィーラント、それに 6 名のシェルパが命を落とした悲劇の登山隊に参加した優秀なシェルパであった。

5月中旬、カベルからコンダス溪谷にはいり、最初の6日間は、この山の西面および南面に登路を探し求めたが、コンダス川の支流ドン氷河とリカー氷河の側から頂上へ達する可能なルートはないことがわかり、東面すなわちワークマンとダイネリの報告しているピーク36氷河からの攻撃に転進することになった。リカー氷河をつめて源頭のホルに達し、そこからピラフォンドウォールの端をトラヴァースして、ピーク36氷河左俣の上部に出ようとするのである。雪の降り続く悪天候の中この転進に約2週間をついやし、6月4日、約5500mにベースキャンプを建設した。この転進に際し輸送隊の一部はカベルにくんだり、ゴマを経てピラフォンド氷河を登り、ピラフォンド・ラからピーク36氷河へ荷物をおろそうとしたが、うまくゆかなかった。南東の尾根にルートを求め、新雪のラッセルに苦しみながらもキャンプを建設し、6月17日約6000mに、一日休養を置いて19日には約6700mに天幕を張ることができた。翌20日ウォーラ、ハント、ブラザーフッドの3人が頂上に向かったが、不安定な新雪のためにピッチはあがらず、予想外に時間がかかったこと、疲労、それに天候悪化の兆がみえたので早くおろねばならぬと判断された。7470mまで到達しながら遂に退却を余儀なくされたのである。

ともかくひどく天候が悪かったらしい。偵察および転進の期間をみると、5月14日から20日まで、18日を除いて悪天候続き、20日から23日までも悪く、晴れた24、25の両日でリカーホルの下の第2キャンプをつくっている。26日午後にはじまった吹雪は5日間続き、BCをつくり、これを補強する間の7月1日から8日までの間、比較的恵まれたとはいえ毎日きまって午後は曇り、1時間くらいは雪が降る。9日から12日までの吹雪はかれらをBCに釘づけにした。14日の朝快晴となったので南東稜の攻撃を開始することに決し、C4にあがった午後2時には雪が降りはじめ、夕方にはじまった吹雪は16日午後までやまなかった。18、19の両日は快晴に恵まれ、C6にあって翌日の登頂に望みをかけたが、20日は出発時には晴れていたが11時には悪化し、主脈とのジャンクションに着くころはものすごい吹雪にみまわれ、退却に決したわけであるが、このブリザードは24日まで続いたという。ともかくこんな悪天候でよくあれだけやれたことだと思うくらいで、南東稜上で小さな雪崩に流されていることも雪の状態が悪かったことを示すものである。

ルートそのものについていえば、南東尾根は不安定な雪の斜面であって、かれらもセラックの崩壊やクレヴァスの迷路に苦労している。かなり傾斜が急なので、ところどころ固定ザイルを必要とするであろう。氷や岩の悪場があるというのではないが、もっぱら雪とのたたかいであって、天候によっては雪崩の危険が

少なくない。ハントもいうように南東尾根の取りつきと、頂上との間に4つのキャンプを設けることができれば、登頂は間違いないと思われる。イギリス隊は悪天候にはばまれて遂に頂上を踏むに至らなかったが、その健斗は十分に賞讃されてよいだろう。

ウォーラは1938年にはマッシュャブルムを攻撃し、ハントはいうまでもなく1953年のエヴェレスト遠征隊の隊長である。

第二次大戦中は勿論、カラコラムでの活動は行なわれなかった。シプトンが1939年に二度目のジャクスガム遠征隊を率いて、カラコラム入りをしながら、スノウレイクで戦争の勃発を知って中止した例もみられる通りである。

戦後もしばらくはサルトロ・カンリあるいはシアチェン氷河を訪れるものはなかった。ネパールのアンナプルナやエヴェレスト、更にアメリカのK2隊などにおくれること数年やっと1957年に、老雄シプトンの率いるイギリス隊がシアチェンに姿をあらわす。

6. インベリアル・カレツジ探検隊

インベリアル・カレツジがこの探検隊を組織したものであるが、その探検局(エクスプロエーション・ボード)が数年間の継続事業の一環としてカラコラムをとりあげ、シアチェン氷河地域の地理的、地質的調査を企図したのである。隊長にはヒマラヤのヴェテランシプトンをつき、K. ミラー、G. ブラット、B. アモス、R. クラッチェリ、P. グリムリ、C. グラヴィーナの6隊員はいずれも地質、氷河などの少壮学者、ドクターとしてオーストリアのG. バッドが参加した。なおパキスタン測量局のクウエレン技師も地図作製を受けもって同行している。

当初の計画は7月中旬にピラフォンド・ラを越してシアチェンにはいり、ベースをロフォンド合流点に設営し、次の4つの計画にそれぞれ2週間ずつをあてていた。すなわち、1. ロフォンドとK36の両氷河の地図づくりとバルトロ越えの偵察、2. テラムシェール氷河上部の探検と、アブサラス山群からジャクスガムへ越す可能性の検討、3. サルトロカンリの試登、4. バルトロへ、またはシアラによってコンダス氷河へ越す。以上たいへん野心的な大計画をひっさげて登場したわけだが、船荷のカラチ到着がおくれ、80名のポータをやとってスカルドを出発したのは7月24日であった。8月1日ガガルに到着、悪天候が続いてサルトロ溪谷上流部の地図づくりを先にすませることができず、クウエレンも本隊と同行して峠越えをすることになった。このときすでに計画の根本的変更は不可避となった。ガガルでやとった12名の高所ポータにつき、シプトンは「かれらは有能で、信頼でき、またよく働けるが、チップをもらいたがる悪徳があるのが困る」とのべている。

8月5日にアリ・ブランザに着き、12人の常備いポータを残して入夫を帰えし、ピストン輸送による前進をはじめ、ロフォンド氷河がシアチェンに合流するところにつくったベースが、ほぼ完全に整備されたのは22日である。日数を予定より要したのでサルトロ・カンリの試登は断念し、シアチェン上流へのトランスポートがはじまった。ところが降雪に見舞われる悪天候で輸送が思うにまかせぬため、源流域の調査はむずかしいことがわかり、再び転進してK12(7428m)周辺の踏査に力を集中することとなり、一度あげた荷物の逆輸送にとりかかる。この間シプトン、ブラットらがK12氷河を探検し、困難な道をきりひらいてK12盆地を調査し、ピラフォンド氷河へ越すホルの偵察などをおこなうことができた。ピーク36、テラムシェールなどの支氷河はすでに今までに踏査されているが、このK12氷河は完全に未探検地であり、狭いゴルジュをなす谷の奥に、かれらはK12盆地と名づけた氷河のひろがりを見ている。この空白地域の探検は9月9日までにすべて終わり、かれらは期日がせまったのでここに全活動を終了することに決したわけである。再びピストン輸送で13日にピラフォンド・ラを越し、24日にはガガルを発ってスカルドへの帰途についた。

結局シプトンの率いるこのインベリアル・カレツジ探検隊は、船荷のカラチ到着のおくれと悪天候下のトランスポートの失敗とにより、当初の計画の大部分は達成することができずに、わずかに処女氷河である、ロフォンド上流と、K12のふたつの氷河の探検に満足せざるを得なくなったのである。

隊員のミラーは59年にはアンデスに遠征し、去年は再びシアチェン氷河にはいつている。60年といえ、われわれのサルトロ・カンリ遠征計画がパキスタン政府から不許可の返事を得たわけであるが、このイギリス隊はいかにしてその許可を得たのであろうか。またこの隊はシアチェンでいかなる活動を行なったのであろうか。計画としてはK12の探検と試登、およびシアチェンからのバルトロ越えを狙ったらしいが、詳細はまだ明きらかでない。だいたい前から問合わせの手紙を出しているが、またどこかへ出掛けているらしくまだ返事はない。しかしバルトロ越えには成功していないと思われる。

7. 残された問題

まずサルトロ・カンリの登山路については可能なルートが、南東稜にしか求められぬであろうことはまず間違いない。この尾根は急傾斜の雪面とクレヴァスのふたつをこなすことができさえすれば、登高可能である。岩場は殆んどみられないし、手ごわい氷壁があるわけでもない。南東稜の取りつき点から頂上まで高度差約2250m、最高キャンプを7000mくらいに建設で

きればしめたものだ。条件さえととのえば第II峯の登頂も不可能ではなかろう。問題はむしろ南東稜にとりつくまでのアプローチである。ピラフォンド・ラからシアチェンの本流を迂回してピーク36氷河を登るか、リカー氷河から主脈を乗っ越して、ピーク36氷河盆地におりるか、あるいはピラフォンド・ラ付近からピラフォンドウォールをおりるか、3本のルートが考えられる。最初のものはオーソックスな正攻法であるが、大迂回によるトランスポートの不経済は、不経済ですめばよいが、降雪や入夫のサボタージュには余りにも弱い。第2のウォーラ隊のとったルートは、リカー氷河の登りと、主脈のトラヴァースの部分はかなりにむずかしいので、現地の入夫のことを考えればやめた方がよさそうだ。むしろ私はその工作に多少の日数は要するとしても、ピラフォンド・ラと氷河盆地との間に荷送り用のケーブルを張りわたす工夫を真剣に考えるべきだと考える。容易な業とは決して思われぬが、10日かけても、2週間かけても、これができさえすれば前進根拠地の建設は殆んど解決されてしまうのだ。

シアチェン氷河地域で残された問題の第一はいうまでもなく、バルトロ越えである。シア・ラによるコンダス氷河へのトラヴァースは早く1912年にワークマンによって行なわれ、イタリアン・ホルによるリモ氷河へのそれは、ダイネリが1930年に片づけた。インディラ・ホルあるいはトルキスタン・ラからウルドック氷河へ、またテラムカンリ山群のどこかをこしてキャガール氷河へのトラヴァースも魅力に欠けるころはないが、政治的には不可能であるこというまでもない。結局、カラコラムのジアアンツが並び聳えるバルトロ氷河とシアチェン氷河とを連結するこの懸案をこそ、ぜひわれわれで解決したいところである。

今年の6月オーストリア隊がゲント(7400m)に登頂したという。シア・ラから上部シアチェンにはいったものであろうが、詳細はわからない。山としては、なおテラム・カンリ(7464mの主峰をはじめV峯まである)、シェルピ・カンリ(7303m)、それにイギリス隊が登らなかったとすればK12(7428m)の処女峯が残っている。

× ×

不備な点が多々あるだろうことは承知の上で以上簡単にサルトロ・カンリとシアチェン氷河地域の探検の歴史的回顧の筆をとった。バルトロほどの華やかさはないが、それでも着実な活動が行なわれてきたことはこの概観でもわかるとおりである。中国とパキスタンとの国境問題が解決していないし、カラコラムの属するカンミールそのものが、パキスタンとインドとの間で常に紛争を繰り返す原因となっている。したがってカラコラムへの遠征は次第に実現が困難となりつつあ

る。この政治的悪条件に加えて、新興国パキスタンが国力の増進とともに自国民による学術調査および登山のために、外国隊の活動を制限する動きもみられるようである。前途の困難はいうまでもないが、58年のチャゴリザ隊の東方への延長としての、サルトロ計画を是非実現したいものである。

さいごに参照した記録類を掲げておく。
 ロングスタッフ、望月訳、我が山の生涯 白水社 1957
 Longstaff, T.G., Glacier Exploration in the Eastern Karakoram, Geographical Journal Vol. 35 (1910).

Workmann, F.B., Two Summers in the Ice-wilds of Eastern Karakoram, London, 1917.

Dainelli, G., A Journey to the Glaciers of the Eastern Karakoram, G.J. Vol. 79 (1972).

Hunt, J., Peak 36, Saltoro Karakoram, 1935, Himalayan Journal Vol. 8, (1936).

Waller, J. and Hunt, J., Peak 36, Saltoro Karakoram: A Mountaineering Analysis, H.J. Vol. 9 (1937).

Shipton, E.E., The Imperial College Karakoram Expedition, 1957, Alpine Journal Vol. 63 (1958).

Mason, K., The Abode of Snow, A History of Himalayan Exploration and Mountaineering, London, 1955.

【付記】

その後ミラー氏よりの手紙とアメリカ山岳会誌にのった通信によると、昨年のK12遠征隊はスチープソンを隊長とし、イギリス、アメリカ、オーストラリア人など計4名の小さな隊でピラフオンド氷河の支流、グラチュモ・ルンバ氷河にはいり、K12の西面を探検したものである。K12から北へのびる主稜上のコルにまで達しているが、シアチェン流域には全然踏みこんでいない。到達高度は約7000mにとどまったようだ。



地図の略号説明

シアチェン地域

山 Sal.	Saltoro Kangri I	7742 m
	Saltoro Kangri II	7705 m
Sh.	Sherpi Kangri	7303 m
Gh.	Ghent	7400 m
T.I.	Teram Kangri I	7465 m
S.K.	Sia Kangri	7422 m
M.S.	Mamoslong Kangri	7525 m
B.	Baltistan Peak	7280 m

峠 A	Bilafond La
B	Sia La
C	Conway Saddle
D	Indira Col
E	Turkestan La
F	Col d'Italia
G	Gyong La

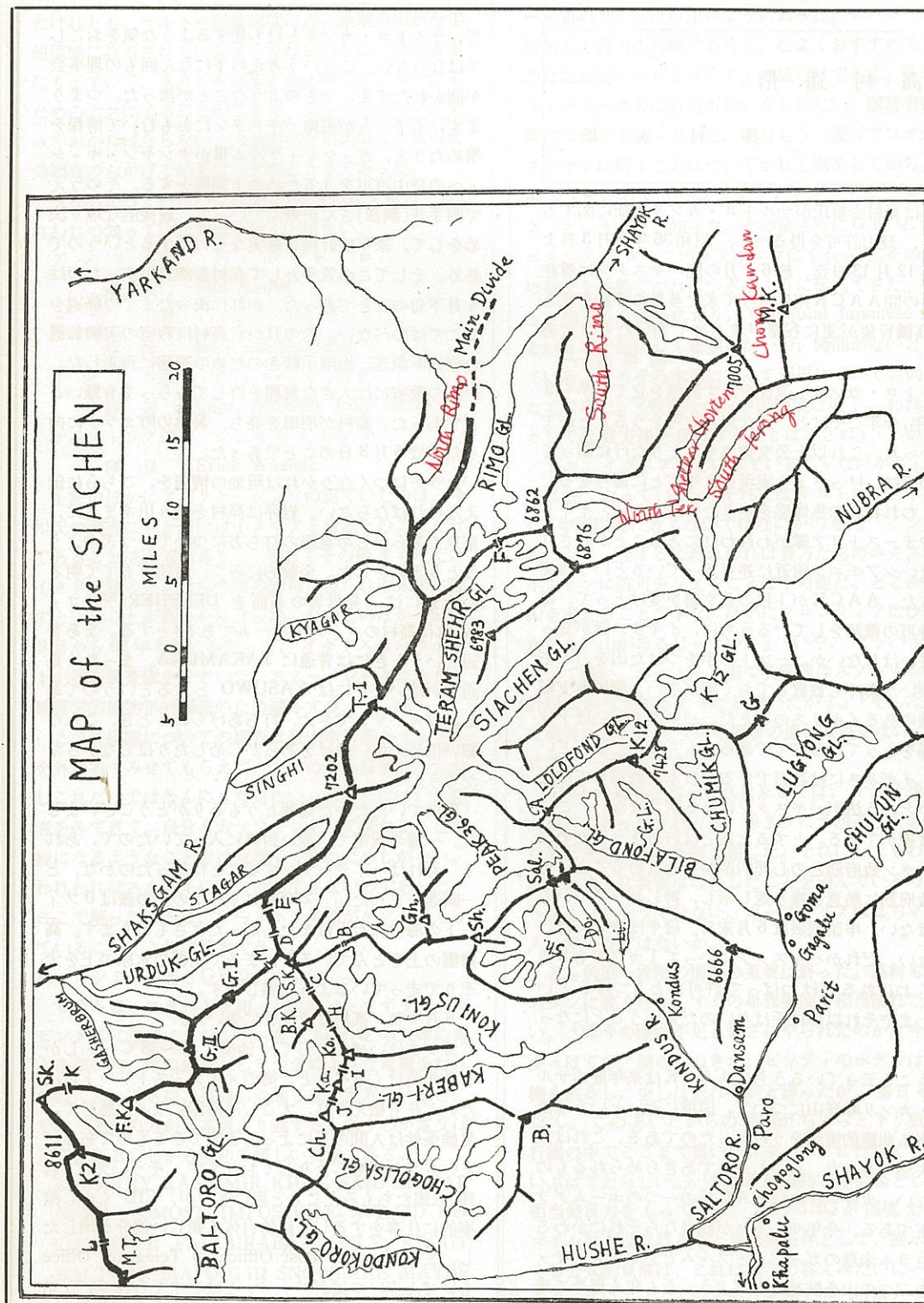
氷河 Sh.	Sherpikangri Glacier
Do.	Dong Dong Glacier

Li. Likah Glacier
 G.L. Grachmo Lungba Glacier

バルトロ地域

山 G.I.	Gasherbrum I	8068 m
G.II.	Gasherbrum II	8035 m
F.K.	Falchang Kangri	8047 m
Ch.	Chogolisa	7654 m
Ka.	Kaberi Peak	6950 m
Ko.	Kondus Peak	6758 m
B.K.	Baltoro Kangri	7312 m
SK.	Skiang Kangri	7544 m
M.T.	Mustagh Tower	7273 m

峠 H	Kondus Saddle
I	Chogolisa Saddle
J	Kaberi Saddle
K	Skiang La
L	Steste Saddle
M	Abruzzi Saddle



Compiled mainly from a map attached to Shipton's article in A.J. 1957

高村通信

高村 泰雄

これは高村泰雄氏がサルトロ・カンリ遠征に関する情報と、登山許可を得るべく、昭和36年6月3日より同年12月13日迄、約6ヶ月の間パキスタンに滞在し、その間ACK宛に送って来た多量の手紙を基とし、高橋旨象が更に谷泰がまとめて書いたものである。

—編集者—

サルトロ・カンリへ遠征を出す計画を立ててから3年。毎年、今年こそはいいながら許可をうることができなかった。これ以上公文書のやりとりだけに頼っていたのでは、けっきょく実現を1年ごとに遅らせるだけだ。われわれの焦燥感をかりたてるものに、イギリス隊やオーストリア隊がわれわれに入ることが許されていないシアチエン附近に連年入っているという事実があった。ACKが1枚の公文書を受けとって、毎年不許可の確認をしているうちに、イギリス隊が登ってしまはしないか。ハントの手をつけた山を、イギリスがいつまでも放置しておく訳がない。植民地支配の経験のあるイギリスのことだ。パキスタンには十分の足場をもっているはずである。もちろんだからといって、イギリスには許可できるが日本に許可してはならないという法がパキスタンにある訳ではない。このことは確かである。とするとあとは許可をうるためにパキスタン政府筋との心理的距離をせばめること、そして政府筋に熱意を繰返し示し、押しの手でいくほかはない。申請期限は6月末日。ぼやぼやしてはいられない。だれかパキスタンにいて1カ月でも2カ月でもねばれるだけねばって許可をとりつけるといふ、いまやそれ以外に手はないのだということになった。

そうこう云っているうちにACKは来年度のサルトロ・カンリ峰登山について、国境に近いという理由から来る悲観的情報をうけとったのである。これは大きな失望であった。しかしこれであきらめられるものではない。カラコラムはACKの一つのホームグラウンドである。今年サルトロが駄目ならそれにかわるカラコラム未登のガッシャ・ブルムとクンヤン・キッシュの二つの山を候補にあげよう。なん年も努めて来たサルトロをあきらめるのはなんとしても惜しい。しかし深追ひして結局何もつかめないのではあまり分別がないというものだ。まず来年はガッシャ・ブルムⅢかクンヤン・キッシュを確実なものとして、そのうえで来年度遠征の途次サルトロの許可を再来年のためにとりつけるという手もあるではないか。ここであわて

て、サルトロ・カンリと討ち死するような気をおこしてはならない。こういう考えの下になん回もの理事会が開かれたすえ、つぎのようなことが決った。つまりまず、若手一人が現地パキスタンにおもむいて情報を集めたいえ、ガッシャ・ブルムⅢかクンヤン・キッシュへの登山許可をうるための下準備をする。そのうえで四手井(綱彦)さんが飛んでいって、最後のな取り決めをして、来年度計画を確実なものにするというのである。そしてこの若手として高村泰雄君が決ったのは4月下旬のことであった。かれに決ったまでの経過をここではのべない。その日から高村は教室の実験装置の完成を急ぎ、出国手続きのための事務に奔走した。かれの教室には大きな無理を許してもらって有難いことであった。高村が羽田を立ち、暑熱の町カラチに向ったのは6月3日のことであった。

カラチにつくなりかれは現地の情報を、こちらに伝えなければならない。岩坪は高村を送り出すまえに、東京であらかじめ電報の打ち方について、つぎのようなとりきめをした。全般的にみて、希望がもてて明るいときには、発信者の名前を DELPHER デルファ(これは高村のニック・ネームである)とする。まあ普通というときには普通に TAKAMURA。まったく見通しが暗いときには YASUWO とするということである。ガガーリンでさえ、打ちあげられるとき、こんな細い信号の使い分けをあらかじめしたりはしなかっただろう。

「羽田でいただいた電報どうもありがとうございました。一種の祝電で、赤い封筒に入っていたので、あれ？ おれはハイラーテンすることに決ったのかな、と一瞬迷いました。」「25000フィートの空の旅は0フィートの海の旅行とはまたちがったよさもあります。高層雲の上をとんでいると、まるで南極の氷原の上を犬ぞりで走っているような感じです。」

6月4日 高村はカラチに着いた。

「カラチはいぜんとして、沙漠で37~38°C……しかし3年前にくらべると、街のメイン・ストリートにはだいたい花も植えられ、すこしは清潔になった感じで、気候条件は人間の手によって克服できるものである、といささか感激したりしております。そういえば(岩坪)五郎たちもみたことと思いますが、CIDも少し能率的に仕事をするし、建物自体も新しい部分が増したし、また General Post Office の Telegram Office もいぜん赤いつばがベッベッとはきすてられていた壁が、今では割合美しくなっているし、パキスタンも捨てたものではない……」

このカラチに着いて、まずしなければならないことの一つは、外国隊の登山申請状況を調べることであった。ACKの目標とだぶって困ったことになる。またACKは国境に近いということで断わられ

たけれども、サルトロ同様国境に近い地域の山が今年他国隊に許可されているようなばあいには、その事実にもとずいて、ACKの来年度の許可をとりつけるためのテコにすることができ。だからこれはぜひやっておかねばならない。大使館の今川氏および牧内氏の調査のおかげで結果はつぎのとおりであった。

「現在わかっているのは以前から(今川氏を通じて)われわれの知っていた知識を殆んど出ない。

- アメリカ隊 バルトロ
- 隊長 Flix Kauth
- ドイツ隊 ナンガ・パルバット
- 隊長 Karl Herrligkoffer
- イギリス隊 チョゴリザ(K6)
- 隊長 Capt. Anthony John Smith
- オーストリア隊 シェルピ・カンリ
- 隊長 Erick Washak

上記のほかにはアプリケーションの出ているのは、今川氏の調査にもとづけばイタリアと日本との二隊だけであることは既知の通り。そしてその後まもなく、イタリア隊のデジオは今年の許可を得られず来年に延すということが明らかになった。なおこのほか「61年8月から62年8月にわたって、イギリスのハウットが学術調査隊をひきいて、スノー・レークに入り、地質学的植物学的調査のため越冬する」

この外国隊についての調査は登山申請書のファイルを外務省でみせてもらえば、大体のことはすむ。しかしこれだけではなんにもならない。ゴールについて走者を見てきて、自分も大マラソンをして来たような気持になるようなことでは何事もできたためしが無い。われわれはスタートに立ったにすぎないのであった。ここで解ったことは、オーストリア隊がゲントに入っていること、これは重大である。

☆ カシミール省とGHQとの交渉

6月6日 スタートを切った高村は、まずラワールピンディに飛び、カシミール省とG.H.Q.の大体の考えを聞いた。その結果としてつぎのような電報をわれわれに打ってきた。英語しか通じない世界にいと、やはり英語の方が日本語より通ずると思うのか電文は英語である。しかも極めて難しい英語である。

MINISTRY KASHIMIR KHAN SAID HISPARE AREA ALMOST IMPOSSIBLE AFRAID RECOMMEND FAVOURABLY ONLY ABOUT BALTORO BIAFO G III SNOWLAKE MAYBE POSSIBLE DEFENSE MINISTRY CHECK G III GOING MEET HIM TALK ABOUT KUNYANG FROM BIAFO AGAIN TOMORROW THEN GO KARACHI AFTERNOON FLASHMAN HOTEL TAKAMURA

ローマ字の日本語で書けばよいのに。結局「カシミ

ール省のカーン以下のように云った。ヒスパー地域は殆んど許可不可能であろう。心よくおすすめできるのはただバルトロとビアフォ地域だけである。GⅢとスノーレークとは許可可能かもしれない。国防省はGⅢについてチェックした。明日もう一度ビアフォからクンヤンに行くことについてかれと話をしてから、午後カラチに行く……フラッシュマンホテル、タカムラ」ということと知った。その後さらにG.H.Q.のジェネラル・スタッフのラテイエフにも会った。その会話の様子を手紙でかれはつぎのように伝えてきた。「ぐっと偉そうな部屋におり、Coloquial Japanese などという本を前にして勉強したいが、時間がないといっている。そろそろ本題に入ってGⅢについてお伺いをたててみた。『残念ながら中国国境に近く、われわれとしては貴方達を保障することはできぬ』『しかしアメリカ、イタリアなどいっているじゃないか?』『事態は悪くなっている』『それではサルトロはどうしてだ(中国国境に近くないではないかの意)』『インド国境に近い。詮ずるにわれわれは貴方たちのエクスペディションに許可を与えることは不可能だ。どこか他の山を考えることですな。ほかにフロンティアにひっかからない山があるじゃないか』『いや、そういう山はすべて低い。カシミール省で英国隊のスノー・レーク計画に許可がでるそうだと聞いたか?』『そんなことは絶対にない。そういう場所の遠征は許せない。』公式論の一点張りである。

GHQの返答を知らされた京都では、十分予想された返答であったけれども、あまりに予想通りであったため行先に大きな困難を感じた。それにしてもわれわれはあまりに現実ばなれしたことを望んでいるのだろうか。いやそうではない。オーストリア隊はちゃんと入っているではないか。

とも角第一段階の情報の蒐集は終った。高村もパキスタンに着くなり、すぐの単独折衝で相当疲れたらしい。「昨今の睡眠不足と暑さにやられたのか、今日は少々ばてて、朝めしぬぎだ。ピンディのホテルは扇風機もあるし、少しは眠れるかと思っただ、毎日42°~43°C。このあいだからの好調がちょっと下り坂。飛行機の中でここまで書いた。モーレツに汗がでる。だいたいばてたらしい。」「GHQは国防省の部局としては相当発言力をもっている。そのGHQが国境より50マイル以上はなれることを必要条件として、提示してくる公式の見解は、これは数学の答えみたいに一つにきまっている。……どうやらあかんという感じ。それにいやまして、外務省を通じてやる交渉はこれからだという一種の期待とあせり」

高村は6月9日ラワール、ピンディからカラチに引き返した。ピンディから帰った高村は、大使館の牧内さんから、外務省アジア課長のハミッド・アリ・カー

ン氏のわれわれの計画に対する意向をきいた。曰く、「クンヤン、およびガッシャ・ブルムIIIについて。前者はまず許可はむづかしい。後者は考慮してみることができよう。」というのである。これは牧内さんが予めきいておいて下さったものである。

☆外務省との交渉

6月10日いよいよ正式に外務省にいて、計画についての可能性をきくことになった。大使館の牧内さんに再び同伴を願って、外務省のアジア課長にあった。

「地図の上で山を説明し、四手井教授が交渉のために来るはずだとも云ったが、『とりあえず、何をすることも。アプリケーションを出せ』という。そして「会見の結論としては『14日頃おえら方との会議(外務省の部長級の人々)にひとまず提出してみる。しかし具体的検討はアプリケーションが正式にでてからでないと出来ぬ。だから早く出すように』」ということであった。

このアジア課長の指示を高村から知らされた京都では、早速クンヤン・キッシュとガッシャ・ブルムIIIの両方のうちいずれかの許可をとりたい旨を記した、アプリケーションを在日パキスタン大使館に6月15日提出した。あまりいばれることではないが、アプリケーションばかり作ってきたAACKの若手は、提出せよという報があると電光石火のごとく、ただちに作成して提出したのである。

6月14日 高村は9日「おえら方の会議」の結果を含めて、外務省のアジア局長と会う予定であった。ところが局長のイルティザ・フセインは休みということでは会えず。高村は仕事のない日を無為にすごさねばならなかった。暑いカラチでの日課は次のようなものであったという。「毎日午前9時前、ごそそ身辺を片づけて9時半朝めし。車がないので20分ちかくかかって大使館まで。ときどき、住友の人が都合のいいときには車にのせてくれる。会社への出勤時、課長さんと社員ののっている車が、学生さんをさらに1人つんで、わざわざ大使館に寄ってくれるなんてことは余り考えられない。大使館でござろして、牧内氏、古川氏と相談・電報がくればそれをみて返事を出す。……大使館で京都あての手紙を1、2時間かかって書く。くだらんことまで、まともなくくだらんと書く。カラチよりは少しはしのぎやすいから、辛棒して読んでくれとだらしくゆるふんで書く。そうするともう午後2時。タクシーをひろって御帰館。ヒルネ、晩めし、ハダカになって眠れぬ暑い夜を悪夢ですごす」

あわててせかせる相手ではない。ようやく19日アジア局長に会えることになった。「まず開口一番ヒスパール地域は駄目だときた。理由は云わない。『その辺り一帯がそもそも許可できぬ』という。『昨年もすぐ

近くのさらに国境に近いはずのディスティギル・サールに登山隊を入れているではないか』という、『Yov know it has become difficult なのだ』とのこと。全く問答無用式だ。ガッシャブルムIIIについては、『アプリケーションを出したか』ときくので『実はなんども空鉄砲ばかりうってきたので、今度は可能性について打診し、貴方より示唆をえた上、万全を期して計画を立てたいのだ。つい先日アプリケーションは提出済みだ』という、『アプリケーションがないと検討できない。架空の問題を討議することはできぬ』と全くガンコであり、お役所である。……『なにしろわれわれは待ち呆けをくらい、社会に対しても以前からカラコラムにおける登山をプロナウンスしつづけているので、social responsibility をすら感じている』という、かれはここで牧内氏とともに始めておもしろそうに笑った。結局アプリケーションがとどいたら好意ある検討を願いたいということでのこの会見は終わった。

ビンディとカラチの暑さにふうふう云いながら、いつ面会が許されるとも知れないお役所まわりをしての結論は、カシミール省、国防省、GHQ、外務省それぞれが一応独立した見解を現段階ではもっているということであった。GIIIについては、カシミール省、外務省は比較的可能性をほめかしている。やはりここで四手井さんに来てもらわねば、若造としかみえない高村には一通りの返事しかするはずがない。一応高村のやるべき事は終わった。島津大使は公館長会議で日本に帰っておられるが、7月上旬になってしかカラチに戻れない。四手井さんも出張許可のことで訪べがもう少し遅れる様子。だとすれば、この間に一度ラホールに行ってベグ教授(カラコラム・クラブの副会長)に会っておくのも全くの無駄ではあるまい。

6月22日 高村はこう考えて一応かれ自身の判断でラホールに飛んだ。「ラホールは涼しく雨も降りますが馬糞がすぐ乾燥して、街中にとび散り、この部屋も馬糞のにおいが満ちあふれている。」

三菱商事の鈴木氏に同道してもらい、ベグ教授に高村は会った。ベグ教授は英国隊のスノー・レーク越冬隊の計画に参加するという。

この日、高村はオーストリア隊がゲントに登頂したのを知った。サルトロはすぐその東にある。その山が日本隊に許可されないというのである。

6月26日 「毎朝新聞を休憩室でみてはいましたが、今朝は偶然にもベアラが新聞をぼうりこんで行った。ネボケ眼で例によってスポーツ欄をみたら次のような記事がありました。

Reconnaissance of Kunyang Chhish, Lahore Team for Gilgit soon, An Expedition sponsored by the Climbers Club Lahore.

「morning tea よりもよく利いて眼がさめてしまった」いよいよAACKの出る幕がなくなってくる。「やはりパキスタンの連中によるエクスペディションはかくも簡単に許可されるものなのか……ゴマメの歯ざりかと思うと、ますますシャクにさわる」ベグ教授に一体どういう団体がきいてみることにした。

☆サルトロの亡霊四度び現わる。

6月27日 高村はベグを訪問した。「予定通りベグさんの教室に入っていくと、これは珍客、1955年56年 KUSE および Joint Expedition のメンバーであった。イナム・ウラ・ハーンに会った。かれを交えて3人でいろいろ話した。まずラホール・クライマーズ・クラブなるものについてきいてみたが、カラコラム・クラブとは全く別系統。ベグ氏にとっては新参者で、全然問題にしていけないという返事。そのうち3人は高村のもって来たデジオのスケッチ・マップをひろげてしゃべり始めた。そのうちにベグさんは『このあいだからエクスペディションのベスト・アイデアは、ピラフオンド・ラをこえて、シアチエンを溯りバルトロにでて、フーシェを越えてくる計画だと思っている』といたので、機会をみて、『われわれは実は以前にカラコラム・クラブもしくは、バンシップ大学とジョイントして、サルトロ計画を出せば案外許可をとりやすいのではないかと思っていた』といた。するとベグ教授は俄然膝をのりだして来た。『もちろんそうとも、サルトロをどうして京大に許さないのか不思議だ。京大は学術調査、山登りでパキスタン側とずっとジョイントを続けて来たグループでもあり、われわれとはもともと関係が深い。ジョイントでやるということになればこちらからブッシュもできるし、許可の出る可能性も大きいだろう』という。ところでベグさんは一体いつのジョイントを希望しているのかわからない。再来年のことを話しているのだったらたまらないので、『われわれは来年を希望している。今からやると来年の許可をとるのは一寸むづかしいだろうか』という、『残念ながら、私は今夏すでに英国隊のリエゾンとしてついてゆく。したがって来年しか君たちとジョイントすることはできない。来年やりたい』とのこと。現在AACKはGIIIとクンヤンをアプラインしている。ジョイントするならこれをとり下げねばならない。高村は京都に意見をきき、四手井教授が来バしてから正式に話し合いをしたいということにした。ベグ教授もクラブの書記であり、実業家であるハイヤット・カーンに早速あって、相談してみようということになった。これは面白いことになって来た。丁度その日、ハイヤット宅でパーティがある。それに来ないかという。どうせ禁酒国のパーティである。高村はあまり期待もしていなかった。その晩「実業家らしい連中が人によっては婦人同伴で続々やってくる。……人が来る

たびに直立不動で挨拶し、エエ加減ウンザリしていると、飲物はなににするという。ココロのほかになにがあるものかと思つてふりむくと、洋酒のビンがズラリ。ソーダーにウイスキーを飲む。一寸エエ感である。婦人の中で僕が一番きれいだと思つてしばし眺めたのは先輩タイアン氏のフラウにそっくり。西独製のステレオがばかでかい音で交響曲を夜空にまき散らす(美人と音楽は今の僕には関係がないのであると、思い出しました。失礼。)。ここで高村はベグ教授と主としてジョイントの条件について話した。会議は踊るほどの面白味があったかどうかは知らない。こうしてサルトロの亡霊が四度び現われたのである。しかも今度はその周囲にカラコラム・クラブのベグ教授がいる。さらに名誉顧問であるアユブ・カーン大統領がいる。これは亡霊でない本物のサルトロなのかも知れぬ。

GIIIは許可されるかどうか未だ未知数である。ここで宿願のサルトロを追うことに方針をかえた方がいいのだろうか。もちろん、3回許可とりつけに失敗した山であれば、そう簡単にはいくまい。GIIIをとりさげからあとで、サルトロ許可とりつけに失敗したときには元も子もなくなってしまうおそれ大である。高村はこのことを心配してベグ教授がサルトロに乗り気であること、可能性はあるがアプリケーション作成はもう少し待つようにと連絡してきた。

この報を聞いた京都では、喜びとともに「本当かいな」という気持とが混りあっていた。カラコラム・クラブがどの程度本気であるのか問題はここにある。しかしその後詳細な手紙でかなりカラコラム・クラブが乗り気であることを知って、7月7日パキスタン大使館にアプリケーションを提出した。そして高村には「サルトロ大いに乗り気」という電報をうった。

7月12日 島津大使カラチ帰任。ガッシャ・ブルムIIIかクンヤンかの線で大いに援助をいただいた、牧内さん他多くの大使館の方々にはまことに勝手であったが方針を変更して、サルトロ・ジョイントの線かわらぬ御援助を願うことになった。振り出しにもどったのである。そしてその第一歩は四手井さんの来バによって始まった。

☆進路をサルトロに向けて

7月22日 四手井さんカラチ着。

7月24日 大使を訪問して大使と牧内さんとに、今後のやり方を話しあい、結局ラホールでカラコム・クラブの人々と折衝することになった。

7月25日 午後、四手井さんと高村はラホールに向った。ベグ教授はスワートに行って未だ帰っていない。27日によくハイヤットに会うことができた。

ハイヤットの事務所は「一見じむさいと思つたが奥に一寸きれいなかれの部屋がある。入口の部屋に男子事務員兼タイピストが一人。……大実業家ではな

い。C. Ito のカレンダーが壁にかけてあった」ハイヤットが云うには、「まず AACK からジョイントをするという文書をもらいたい。そうすればただちに、クラブの集りを開いて受け入れを決める。パーミッションはビンディの政府にかけあえば1~2日でえられる。文部省、外務省、国防省に関係があるから簡単だ」というのである。2~3日で許可がえられるというのはちょっと調子がよすぎる様である。ともかく、この会議のあと「政府の許可があればカラコム・クラブとジョイント・エクスペディションを望んでいる」という旨の文書を手渡した。そしてベグ教授同席のうえで、両者のジョイント条件などについて予備交渉をしたいと四手井さんと高村は考えたのだった。ところがベグ教授は旅行にでてラホールに帰ってこない。結局約一週間、時間をもてあますことになった。こんな時にホテル代のかさむラホールの街で、無為にすごすのは意味がない。二人は8月2日から5日までカガン・ヴァレーに行った。

8月7日、6日に帰って来た、ベグ教授とハイヤット・カーンと一緒にホテルで予備交渉をはじめた。

「ハイヤット・カーンがベグをリーダーにしたいと考えている。ベグはハイヤットのいない席で京大側がリーダー・シップをとるべきだともしているが、ハイヤットが承知せず、パキスタン・リーダー、日本・リーダーの二本立ての線を出した。パーティとしてリーダーが一人ではよいことは承認しているのだが、どこまでもこだわっている。席上さらにパキスタン側の隊員は5人。日本側隊員8人。そしてさきに当クラブが今年計画していたサルトロの偵察行はベグ教授に時間がないこと、クラブの財政が許さないことから中止することにきまった。

ところでこのようにいわば両団体の私的な取り決めが進んだのだけれども、もし政府がこの計画を許さなければ仕方がない。このためには有力な政府との関係をもっているという、カラコラム・クラブが政府に正式に合同登山の申請をしてくれなければ困る。でなければ、都合が悪くなったというので、カラコラム・クラブがやめるといいたしてもわれわれは何とも云えないのである。まず二人はカラコラム・クラブから正式にパキスタン政府に文書を出すように要請した。そしてあと G III についてのアプリケーションを提出している外務省にサルトロについての見解を打信してすることにした。

8月9日 カラチ帰着。四手井さんと高村とがラホールにいて留守の間に、国防省から出頭するようにという通知がカラチの大使館から来ていた。

8月11日 国防省のキャプテン・アサドウラ・カーンに会いに行く。

「立派な地図をひろげガッシャ・ブルム III のアプリケ

ーションにつき文中の経緯度と地図上のそれとが合致しないが、どうなのだ、ときいてきた。なるほど、これはおどろいたことに、ガッシャの位置について、アプリケーションの記載は誤っている。すまんすまん、われらはエエ地図が手に入らんと云ったら苦笑していた。サルトロ・ジョイントのアプリケーションについてきいているかときいたら、まだみていないという。そこでこちらでもっていったアプリケーションの写しと、カラコラム・クラブの申請書の写しとをみせた。このカラコラム・クラブのおすみつきをみて、また地図を眺めているかたに、牧内さんと一緒に総攻撃をかける。質問攻めにしたところ、かれはどちらかという、『サルトロの方が、ガッシャよりもよらしい。わたくしはサルトロを推進するよう貴方たちにすすめます。とくにジョイントというのは非常に結構だ』『ではジョイントのサルトロ許画許可の可能性は90~100%と考えてよいか』と牧内氏、『あと2, 3人の意見もきかねば、わたくしひとりでは申しかねるが、貴方たちは今日から遠征計画の準備を始めてよろしくう』『ホントカ!』

席上このような会話が取り交されて G III のアプリケーションをとりさげて、サルトロ一本で押すということになったのである。これまで外務省で経験したような曖昧な返事でない。こうして「サルトロ計画ほとんど確実」という電報を京都でうけとったのは同じ8月11日であった。四手井さんが在バ中にめどがついたのは幸いなことであった。正式の回答ではないのもう一つ手放しで喜べないけれども、ガッシャブルムを追いかけていたわれわれの前に思いがけず、サルトロがとびだしてきていまにもつかめそうなのである。ガッシャを兎にたええるのはあまりに大きい、兎を追っていて思いがけず射程の中に熊が飛び込んでき、一発致命的ではないが当たったところである。もちろんカラコラム・クラブでもそれに似たことを考えて AACK をカモと思っているかもしれないが、それでもよい。

ところで高村はパキスタンに来る当初から、この許可とりつけの仕事が終り次第いくばくかの時間をとって低いのもよい、一つ山を試登してやろうと考えていた。四手井さんもその気持は同じ。見通しがこのように明るくなったあとはカラコラム・クラブのダッシュのかけ方に全てはかかっていると思って、ここで山に入ることにした。高村には待ち遠しい山行であった。カラコラムクラブと隊員の件で話しあいのためラホールに立寄ったのちギルギットへ。四手井さんは9月上旬に帰国しなければならぬ。あまり遠くにはいけない。だからラカボシの近くのドバニにいった。8月25日下山。最終的なカラコラム・クラブとの交渉、政府へのブッシュを済ませたのち9月1日帰国の途に向った。帰国の際高村は四手井さんからこれまでの労のほ

うびとして、一人でもう一度山に行くことを許された。

秋がもう間近にきている、もし山に入るなら1日でも早く入らねば。しかもせつかくの機会であれば、サルトロの偵察をしたい。せめてビラフォンド・ラまで、サルトロのみえるところまでは行ってきたいものである。こう考えて再びスカルドにゆくことにする。途中ハイヤットが政府との交渉をしてくれるように、一緒にビンディに同道させようと思ってラホールに立寄ったけれども、ハイヤットは友人が死んだのでいけない、といって行く気配をみせない。結局ハイヤットの文部省、外務省への紹介状をもってデッチの小僧のようにビンディに行くことになり、その後急いでスカルドへ向った。

ところがこの頃京都では大変なことがおこっていた。パキスタン外務省から同在日大使館宛にサルトロを含めて、国境付近の山は許可できないであろうという通達をして来たことが伝えられたのである。これは AAC K にとってショックであった。そして正式な不許可の通知はやがて AACK に対してなされるであろうというのである。なんとこれは全くどんでんがえしではないか。国防省であれば楽観的な見通しを示してくれていたのに、これはどうしたことか。サルトロがだめならガッシャはもちろんのことだろう。するともうパキスタンの目ぼしい山はみなあきらめるといことなのか。そしてネパールかどこかに転進ということなのか。AACK の若手は夜おそくまで対策に苦慮した。それにしてもまずこの返事が、どういう筋から出たのか、カラコラム・クラブとのジョイントを承知の上での返事かどうかをしらべ、急いでカラコラム・クラブからもうれつなブッシュをかけてもらう必要がある。そのためには高村をよびもどさなければならぬ。蔽入り中をむりによびもどすようで気の毒だが、これも非常のときゆえ致し方ない。飛脚をスカルドから走らせてでもひきもどさねば、と考えて速時手配した。しかしわれわれには不幸なことに、そして高村には幸いなことに、時すでにおそくかれはスカルドを出てしまっていたのである。仕方がない。正式通知がおくれるのを期待するより手はない。幸いなことに在バ大使館側から、「今年オーストリア隊がゲントに入れていながら、日本にサルトロを許さぬのは理屈にあわない」と抗議してくださった結果、バ外務省は再度検討すると回答してきた。時間がいくらかかせげたのである。

他方高村はスカルドからサルトロへの道をジープでまず出発した。

9月15日 カバルまでジープが利用できる。「12.30 スカルド発。燃料代はすべてこちらでもつからということにして180Rs 支払った。その後ジープ屋は少しでもうけるためにバザールで荷物をかき集めて来よ

って、小生は運転手のとなりにも坐ったが(同行の)グラムは荷物の上で小さくなっている。……17.45 カバル。大きな村である。眼につく作物はアワである。なおスカルドーカバル間はクーリーもしくは馬によるトランスポートが必要。馬一頭の間15Rs だそう。3日かかる。

16日 カバルでクーリー一人やとう。1日4Rs 食糧代2Rs。それにリターン・ハーフ。PA のきめたレートが今では周知のこととなって、ごまかしがきかない。ここから Saling までは二度ザークにのる必要あり。一人対岸まで2Rs。Saling で一人いきのいいクーリーをやとう。かれはカバルのラジャヤが Saling に行ったときにはそのコックをする男。仲々 cooking を心得たもので大いに便利だった。これで小人数総勢四人の隊にも正式の料理人がいることになった。……この日の予定は Huldi まで。はじめは近すぎると一寸文句を云ったが、さにあらず Huldi についたときはええかげんばててしまった。18.20。

17日 今日は Chino まで。地図上の Chino より約1マイル上流である。例の“ホバニ”はもうシーズン・オフ。ほとんどは乾しアズ。それでもこれにも熟期のちがいがあるとみえて、オクテの木にはまだ少し実が残っている。それをむさぼり喰う。この頃麦の取り入れさかん。すでに脱穀しているものも多い。刈り終わった畑ではそろそろ荒起しをしている。冬の間土を掘りおこしておいて、3~4月に堆肥を入れるらしい。バクリの糞と一緒に人糞も肥料になるもよう。この日やや疲労し腹具合がおかしい。

18日 先をいそごう。いよいよ Kondus 入り。Kondus に入って約2時間。右岸からの小谷の扇状地に広い畑あり。このあたりちょっと乾燥してチベットを思わせる風景。ソバの刈取中。ソバは実とりをするよりも青刈りにして羊のエサにする方が多いようだ。それでソバが沢山あるにもかかわらず、かれらが一向にソバを喰っているのをみかけない理由がのみこめた。今日は Lachit Village まで。この村は貧乏村でみんな服装は最低だ。……Kondus Valley は右岸をゆくが道はよらしい。この日夕方少し早目についたので Lachit のところで西側から合流している谷を約1時間さかのぼってみた。夜テントの外は半月で明るい。間もなく満月になるが、これでいく度パキスタンの満月を見ることになったのだろう。

19日 全くの快晴。いよいよ最奥の村をみる日である。7.00 すぎ出発。Chogagron で左岸にわたる。地図の上でこのあたりからサルトロがみえるのじゃないかと想像された。……10.00 頃ついにサルトロのサミットがみえた。これがわれわれを悩ませつけて来た張本人かと複雑な思いである。頂稜は雪をいただいているが、こちら側のフェースは赤茶けた岩壁でちょっ

と手をつけられそうにない。それにこちらからみる左稜線は悪く、なるほど右稜線、すなわちハントのとったルートしかネエなアと思う。望遠でしこたま写真をとってやっとおみこしをあげて、ものの10分もたたぬうちに、今度はチョコリザだ！ まごうかたなきマナイタ頂上、上から1,000 m以上の部分は真っ白であるが、下部は前山にさえぎられてみえない。おれたちは3年前あの山とっくんでいた。そして、あの頂上はおれたちによって登られた。感慨無量である。……Skarmadingではクルミをうんとこさたべた。ここにくる前 Kondusとの合流点すこし上流で橋を渡った。……晴れすぎて暗いような空をにらみながら谷の屈曲点をひとつつくと、突然眼前がひらけた。ま正面に Sherpi Kangri, その右に Gasherbrum IV みたいな岩峯、このときは前屋根にさえぎられて Salto へみえず。丁度涸沢を何十倍かにしてそのどまんなか、穂高沢に Sherpi Glacier をもってきたようなもの、涸沢のポーデンに Korkondus があると思ってください。

20日 昨夜たてたスケジュールにしたがい行動開始。Likah Glacier というのは下からではちょっとわからない。小生もさいしょ気をつけていたが、危うく谷のとりつきをまちがえるところだった。15,000 ft 近くのアブレイションパレー中にテント。水あり、ブッシュありで快適。クーリー二人はここで一泊。翌日解雇、くだっていった。この地を仮りにC1と呼ぶ。

21日 偵察ではあるが少し荷上げもしておこうと Glam とともに装備、食糧を少しもって出発。クレヴァスひとつない flat なところをゆく。屈曲点近くになると、そろそろクレヴァスが出現。屈曲点の部分をすぎ上流がみえた。本番はこれから。眼の前にはアイスフォールが二段がまえてたふさがっている。アンザイレンもせず、第1アイスフォールは約2時間で通過。第2アイスフォールは猛烈をきわめている。ハントの記載どおりである。これを避けて Likah Col にとりつきたくなる。Glam はアイゼンがないし、コルにつくことにする。荷物をコルへのとりつきに置いてひきかえす。帰りは2人とも高度影響出てフラフラ。Glam はC2予定地、すなわちコルのとりつき付近で頭痛がすると昼寝をした。高度約16,500 ft 氷にビッケルをふるうと、そのたびに頭にガンガンひびく。翌22日は Glam の頭痛がほんとうにひどいようなので、小生も休養をとった方がよいと考えた。小生にとってはこのオフがかえって仇となった。午後、テント地の裏山に登って Likah 氷河上部の偵察をする。翌朝、なんだか身体の調子がおかしくなったのです。

23日 装備、食糧一切をもって出発。なお食糧はチャパティと村で手にいれた羊肉。……きのうは往復までしたのに、今日はたいした荷物もないくせにずいぶ

んばてた。ルートのことで Glam と右だ左だといいながらあるくが、ときどきその Glam にムヤミに腹が立ってイライラする。13.00 C2着。頭痛ひどい。ただの高度影響とはちょっとちがう感じ。疲労のようだ。ベーコン3枚ほど焼いたものの、それが喰いきれず、ロティも一口で岩陰に寝る。テントを張らせて口から頭だけ外にだす。アップアップ、まるで金魚だ。脈はく120を越している。ひどいばてようだ。情なくて涙がでそう。Glam が心配そうに覗いている。今夜から Glam を同一テントに寝させる。かれは Seelting bag をもっているといっていたが、あにはからんやそれは例のドンゴロス状の毛布のことであった。夜少し調子回復。これなら明日はコルをなんとか越えられそう。

24日 朝起きてみると、やっぱりコンディションは悪い。18,000 ft まで1,500 ft の登りに3時間以上かかった。はじめむこう側 Upper Likah にいききにくくってしまうつものところが、これはどうしたことか。コルについて Upper Likah Glacier がすばらしく状態のよい Snow field であること、その先には Peak 36 Glacier と Likah Glacier を境する Salto の South-east Ridge がみえ、South-east Face も少し望まれる。にもかかわらず、みともないことにこちらは立っているのがやっただ。Glam はもうここで止まるべきだという。小生しばしむこうにくだることを主張。Glam はテントを立てている。かれに押しきられた。さて、いったんテントにはいってみるともういけない。頭はわれるように痛く、後頭部が堅くなって熱い。うとうとしているうちに、ときどき目が覚める。時おり頭だけつけかえてもらっているような夢をみる。実際この頭の存在をこの時ほどうらめしく思ったことはない。

25日 天候はいぜんとしてすばらしい。偵察に出るには絶好である。しかしこの時には昨日からの経過を思って、前進は思いつかぬことになっていた。ひとまずくだらう。9.00 ふらふらと下山にかかる。この時も Upper Likah は妖女の舞踏場？ のごとく、平らかで美しく誘惑にみちていた。C2までの長いこと。C2でまたテントを張り、ひっくりかえる。夕方から再び猛烈な頭痛。夜中から雪が降り始める。サラサラとテントに音を立てる雪の無情さよ！

26日 起きだしてみるとたいした降雪ではない。しかし全天雲におおわれ冬の気配。思いきって Korkondus までくだることにする。9.00 スタート。13.00 C1着。C1に残しておいた羊肉でカパーブをつくり、おかゆをたいて、四手井先生からゆずりうけたシオコブをおかずに喰う。19.30 キャンプ帰着。

27日 今日は休養だ。頭痛はどうやらとれたが、今度はむやみに腹具合が悪い。「人間にはどうしてから

だがあるのでしょうか。」村人多勢集りテントの外から「ダワイ、ダワイ」馬鹿野郎、こちらの葉がないのに！

28日 Likah にはもどれない。せめて Dong Dong を覗こう。村人曰く、「1日では Salto がみえるところまでいけない。2日かかる。」とのこと。Glam と2人早朝出発。Dong Dong 谷の入口付近、アブレイションパレーが広い。いよいよ左岸のモレーンを登る。12.00 すぎたがいっこうみえそうにない。支尾根がさえぎっているのだ。13.00 あくまでみえないのにいざさか腹が立ち、ヒョロヒョロと石を渡りながらあるいていると、やっと思えた。全くの Rock Wall。雪少ない。Salto 西面を眺めることができたので、いざさか感激。Glam に労をねぎらうと、かれも嬉しそうな顔で、「Thank you, Sahib.」という。帰路アブレイションパレーの中をあるきつつ、灌木の葉が黄色くなっているのをみ、やや弱くなった陽に青く光っている対岸の山々を眺めていると、秋はカラコラムにひっそりとしのびよっていることを痛感。ススキの穂の光る日本の秋山を思いました。

29日 Korkondus から Lachit へ。

10月2日午後 Khapalu 着。

10月4日 12.00 Skardu 帰着

サルトロ偵察行終り。秋を感じたりするところ高村も大分郷愁がつって来たのだろうか。旅行の後半の頭痛が一層それをつのらせたかもしれない。さびしい。手紙をよんでいてもなにかそんな気がする。こうしてスカルドに帰った高村をまっていたものが、パーミッションでなくて事態が悪化しているという手紙だったからショックである。「いざさかポケットしていた頭の上にドカンと爆弾がおちたような感じで5日夕、すぐさま P I A 機にてラホール着」

6日 ハイヤットに会って、事情を説明し、カラコラム・クラブの尻たたきをやった。「結論的に申せば、かれはいぜんとしてとくに新しい方策をとるまでにキーンに活動していない」ただ「幸いパキスタンの外務省よりハイヤットのところに一通の書類が来ており、『カラコラム・クラブよりの申入れをうけた。許可に関しては今後検討する』という意味」のことが書いてあった。これに不許可と書いてないのが頼みの綱。先づカラチに帰って新しい事態がおこってないかどうかを確かめてから、ハイヤットに国防省、外務省に向かうようにむけることにした。

こうしてカラチに帰った。ところが、大使館で頼みの綱としていた牧内さんがフンザにいて留守だという。そして帰るのは15日頃だとか。「目下のところ一体どうすればよいか一寸頭に来ているところ」大使も新たに島津大使に代って、古内大使が着任しておられる。京都でも、高村を帰国させたものかどうかを考え

た。あまりに長くなっては教室の方に迷惑である。だが現在の状態は帰国させる理由がない位中途半端な状態なのである。どうしよう。高村にはすまないがもう少しねばってもらうほかあるまい。その頃である。新聞で池田首相の訪ベのことがしきりとりあげられるようになった。そうだとこのチャンスを逃してはならない。これを機会に大使館で努力していただくように頼もう。高村には気の毒だがそれまでねばってもらう。一も二もなくこう決ってしまった。幸い新大使は山登りには大変興味をもっておられるという。

10月20日すぎ。新大使のための日本人会主催の歓迎パーティがもよおした。「歓迎パーティにて牧内氏のアイデアにより、新任大使の前でノドをきかすことになり、日本民謡は沢山でたので lonesome Yodeller を今まで出したこともないくらいでかい声でやりました。Yodeller はまったく腰くだけでお笑いでしたが、一等書記官曰く、これで Salto は確実だよ。と申すのは古内大使は以前オーストリア在任の経験あり。山には大いに興味があるそう。事実大使はその後、積極的にこの計画の実現に努力して下さることになった。あとは最後のチャンス首相の訪ベをまつのみである。高村は訪ベ受け入れ準備に忙しい大使館にかよい、受け入れの手伝いをした。

11月17日 池田首相一行来。京都からはできたら首相にあってお願いしろという手紙。ところが高村は大使館の手伝い役ということで、総理到着以来メトロ・ポール・ホテルにつめ、新聞記者関係の世話をとおせつかることになった。会うにも公式の予定がぎっしりつまった首相に会うチャンスなど仲々みつけ出せるものではない。「そういうことで焦りを感じている矢先へ(3日目) press conference には出席しない大使が一足先にゲスト・ハウスを出てこられた。車がまさに滑り出そうとしたとき、小生一寸近づいて、大使にあいさつ。とたんに大使、車の窓をあけて、『高村君、池田さんからアユブ・カーンに直接云ってもらったよ。許可を与えると約束したよ！』『大使、それは本当ですか』『うん大丈夫だ、よかったねおめでと』『そうですねこれは感激です。有難うございました』こうしてついに6ヶ月の努力の甲斐がみえてようやく、ガッツャブルIIIにでもなく、クンヤンでもない、サルトロ・カンリの許可が三年目にとれることになったのである。11月20日正式の許可の書類をうけとる。そして、最後のカラコラム・クラブとの打合せを終えたのち、12月12日、62年の再来を約しながら日本へとカラチを飛び立った。

高村通信もだからもう不要。あとは高村自身から直接話をきくにしくはないという訳である。

新 刊 紹 介

—Der Dritte Pol—

—The Story of White
Continent—

G・O・ディレンフルト教授の

『第三の極地』をめぐる

薬 師 義 美

昨年2月のはじめ、ミュンヘンの本屋から分厚そうな本らしい小包が着いた。自分にはそこへ本を注文した覚えはないし、何かの間違いかないと思いつつ、紐を解いてみた。出てきたのは Prof. Dr. G.O. Dyhrenfurth の「Der dritte Pol」である。あんな偉い人から本をもらうような私でないが、はさまれたカードには「著者の命令により貴下に賜る」とあるから、手ばなして喜んだ。多分、一昨年作って同教授にも送った Geographical Journal と Himalayan Journal のインデックスの返礼だろう。

早速、ディレンフルト教授の心づくしに礼状を書き、ただ通り一べんの礼状では好意にむくられないとばかり、60年度の日本のヒマラヤ遠征隊の結果をリストにして知らせた。もちろん、中には気づいた二、三の誤植も指摘して。チョゴリザの項では桑原先生がタキオになっていたし、1960年8月17日登頂のトリヴォールが入っているのに、同日に登頂されたノジャックについては何も書いてなかった。

折りかえし教授から航空便がきて、ノジャックという山ははたして7000米峰なりや、一体どこにあるのか、くわしくお知らせあれという次第である。あれほどのヒマラヤの大先生であるからには、ノジャックぐらひはご存知だろうと思ったのに先生も驚いただろうが、私も驚いてしまった。すぐ酒井さんであって、ちょうどアメリカへ送ったという報告のコピィを借り、そっくりタイピングして送った。

でもこんな事を話しても、デ教授を云々する気はもうとない。オーソリティといえども、知らない山がまだあったのである。しかし、こんなエピソードがなければ、「第三の極地」にヒンズー・クシが全くふれられていないことをもって、不問に伏すことができたわけであるが。

前置きが長くなったが、この新版の「第三の極地」は邦訳も出た「Zum dritten Pol. München, 1952」の改訂版だろうぐらいに思っていたところ、序文をみるとそうではない。日本語にすると共に「第三の極地」

だろうけれど、ドイツ語のニューアンスからして違っているとおりである。便宜上、旧版、新版と称するが全く別のもので考えてさしつかえない。

旧版が書かれた時は、登られた8000米峰はアンナプルナのみ、新版では残されたものがゴサインタンのみ。この「第三の極地」は早晚改訂される運命をはじめからもっていたわけである。以下に内容を簡単に紹介してみると、第一に気づく点は旧版は8000米峰をエヴェレストから高度順に書かれていたのに、今度は東の方から西へ進められている、

1. カンチェンジュンガ山群
2. エヴェレスト山群
 - a. チベット側
 - b. ネパール側
 - c. 1953年の勝利
 - d. パルン河周辺
 - e. チョー・オー
 - f. マカルー
 - g. ローツェ試登とエヴェレストの地図
 - h. エヴェレストとローツェ
 - i. 1957年から1960年まで
3. ドッド・コシとトリスルの間(シツジャパンマ)
4. ブリ・ガンダキの両側(マナスル)
5. アンナプルナ山群
6. ドーラギリ・ヒマール
7. ドーラギリとナンガ・パルバットの間
8. ナンガ・パルバット
9. カラコラム

という具合で、配列はもとよりのこと、新しい写真が多数入れかえられているし、地図も少し書きかえられている。

そして注目すべきは、新しく測量されてきた高度を使っていることだ。例えば、ガッシャーブルム四峰はメースンの測量によって、7980米と従来いわれていたのが、ブロード・ピークからとったクルト・ディンベルガーのパノラマ写真により、7925米に引きずりおろされた。これに対してキャシンやマライニはどう云っているか知らないが、もちろん高くなったものもある。

またアンナプルナ四峰では、53年のAACKが一言半句もでてこない。ついでに云うと、今西錦司先生と今西寿雄さんは混同されているようで、本文にはK・今西とT・今西があるのに、索引ではT・今西一つである。

さて、デ教授の研究法はマルセル・クルツと対称的であることは周知の通りだが、8000米と7000米峰の記述が中心をなしている。そして本文のあとに、例の如く「8000米峰と7000米峰」として、7000米以上の

登頂された山々が、年代順に1907年のトリスルから1960年のトリヴォールまで並べられている。このクロニクルに上述のノジャックが出ていないという次第。編年史のあとに参考文献のリストがずらりときて終りである。英語版が出るかどうかまだ聞いていないが、再版か英訳版には、このように訂正して欲しい点がいくつかみられる。

最後に、日本語はヨーロッパ人には極めてむづかしい言葉であろうが、日本のことはさっぱり向うへ通じていないらしい。言語障害や彼らの不勉強をせめる前に、日本のコミュニケーションの怠慢をせめるべきでなかろうか。邦文報告書に英文レジメをつけたものは非常に喜ばれている。

話はあらぬ方向にそれたが、私の云わんとする意をくんでいただけるものと考える。

G.O. Dyhrenfurth: Der dritte Pol, Die Acth-tausender und ihre Trabanten.

München: Nymphenburger Verlagshandlung, 1960. 263s. 35 Bilder auf 32 Tafeln, 16 Karten. 4 Zeichnungen, 6 Profil-Serien. DM. 28.00



ANTARCTICA

—The Story of a Continent

北 村 泰 一

マクマルド・サウンド……ほんの50年も前は、そこはこの地の際果ての地、氷と嵐の荒れ狂うままにまかされた地上の極南の地であった、マクマルド・サウンド……それがどうだろう今日のあの狂操といっても良い位の繁栄(?)ぶり。そこは今日ではもはや未知のそして夢と憧れに満ちた土地ではなく、恐らくは南極中で最も人口の密な、そして忙しい地域の一つになっている。グローブマスターの様な巨人航空機が定期的に遠くニュージーランドより飛来し、極点基地、バード基地、アデア岬基地等諸々に点在する基地に毎年何百トンもの資材や人員を補給する、この地域で最も重要な地点の一つになっている。

I・G・Yが始まる時、このマクマルド・サウンドはI・G・Y・基地の一つとして選ばれたが、そこは無論かつてのスコット探検隊の勇壮な、しかし悲劇で幕

を閉じた一大探検劇の展開されたところ。そしてそのメンバーの一人であったデベンハムによって、もう何年も前にこのマクマルド・サウンドの詳しい地図が作られていた。彼はその当時若いオーストラリア人として参加し、その後ケンブリッジ大学の教授更にスコット極地研究所の所長も兼ね、そして今あれから半世紀を経てこの書を書いた訳である。物語はもう一昔のものとはなってしまったけれど、彼の筆力は今猶それらを生々と美しく再現させ、読む者をして飽くことを知らしめない。風でエグリ取られた果てしなき氷の荒野、いみじくもつけられたモーズンの“Home of Blizzard”，網をさくに似た烈風、それが冬の暗黒の日々も、太陽の沈むことなき夏の日々も、絶える事なく続くアデリーランドの毎日。それが稀に風が止み、快晴となると前とは違って空はあくまで碧く、そして細かい氷片がどこからとなくキラキラと舞い落ちる。私は読みながら、いつしか猶南極の地に居る幻想に陥ち入る事が屢々であった。

物語は“発見”と“探検”をよくバランスして語られているけれど、著者は特に二人の探検家 Capt. James Cook と Capt. Thaddeus Bellingshausen の二つの発見航海にカコブを入れている。この偉大な航海は、いずれもほんの40年間程に相前後して行われたが、特に南極海に関しては、唯荒れ狂う海、晴れることのない暗い空、恐ろしい力で行手をはじむ巨大な氷以外に何ものもないことが報告され、これが英国にして50年ロシアにして一世紀もの間、彼等の後に続くものの心を逡巡させた原因であると述べている。

やがて南極探検の黎明期。帆走の時代より蒸気へ、そして油の時代と探検の歴史的推移を追い、遂に近代航空機時代になって如何にドラマティックな探検と発見が為されたかを強調している。しかも著者の優れているところは、一これは非常に大切なことだが一彼の時代に探検が人曳という例へ原始的な方法で為されたとは云え、彼は当時にしてすでに近代的探検素養を身につけていたことである。

トラクター、航空機、クレバス探知機、無線機等、当時無論未発達でものの用には立たなかったけれど、そうしたものに思いをめぐらし、それでいて猶犬糧の有用品を悟り、細かい地図や、つっこんだ科学的調査にはその欠くべからざることを説いている。

極地探検には、とてつもなく大変な費用がかかる。1958年バード基地を建設する為には、40 ton の tractor が20 ton もの橇を曳き(日本の場合は2 ton の雪上車が1.5 ton の荷を曳く、これでどれ丈の事が出来るというのだろう)、そして650 miles 以上もの旅行をした。

フックスの南極横断はスコット探検隊の5倍もの費用を要している。しかしこれでさえ1956年I・G・Y・

基地建設の時、事故でアメリカが失ったグローブマスター3機の内の1機の費用の1/2にすぎない。

話は更に南極をとりまく海辺の生物の世界に及ぶ。南極海の生物は誠に色彩にとみ、小は diatoms から大はアホウドリまで含み、その中にはペンギンの不思議な習性、ドロボウカモメの飽くなき食欲性、Giant Blue Whale が毎日1 ton もの小エビをガブガブのむ話、Seaelephant の活気に満ちた生活、アザランの妻をめぐる猛すごい争い等々、これ又読む者をして小供のオトギ話の世界にひき入れられる感じである。

こうしてこの書物はその話を古今より animal life まで美しい一つの曲線にのせ、且リズムカルに進めてゆくけれども、唯一残念なのはこの物語が1958年で以て終わっていることである。つまり今一つ南極につ

いて重要な事、その領有権をめぐる1959年に提結された南極条約については一云もしるされていないことである。南極をめぐる領有問題は、それ丈でも一つの小冊子を作りうる位だが、デベンハムは「南極は地上に現存する唯一の自由な土地、各国の学者が何ら政治的拘束を受けず、協力して研究出来る唯一の場として何人の領有も認めない」とする主張を強く支持した最初の人丈に彼のこうした政治論争に対する意見が聴けないのが残念である。

南極——白い大陸の物語——

264頁 New York

Macmillan Company

¥ 1500

会 員 紹 介

木 原 均 氏……………並 河 功

並 河 功 氏……………並 河 治

佐 島 敬 愛 氏……………酒 戸 弥 二 郎

名誉会員 木原 均博士

博士は1893年生れて今年68に才なられると思います。大正7年北大農学部卒業で、当時北大におられた郡場寛先生(後の本学理学部教授、旅行部やスキー部の部長、理学部長などをされた)の門下です。筆者も同門です。木原君は学生時代から秀才でもあり、またスポーツマンとして目立っていました。野球の名投手、スキーの第一人者



であり、なおテニスをよくし、短距離が早く、ディスクスやジャベリンなどを投げていたようです。学生時代は植物生理学を修めたのですが、卒業後は小麦の遺伝を中心に研究を進めました。当時遺伝学は生理学のえひとつの分野であるという考方もあったものです。木原君の発表は細胞遺伝学の相当広い範囲にわたっていますが、40年続いてプログレッシブに深く広くなっていたのは小麦の研究です。その問題では世界の学界で重きをなし、国内でも昭和18年には恩賜賞、23年には文化勲章と学者として最高級の表彰を受けてい

ます。

木原君が京都大学に来たのは大正9年、理学部の助手としてでした。11年に講師、13年に理学博士、農学部助教授、その年にドイツに留学、昭和2年に帰学して農学部教授、30年に現在の国立遺伝学研究所の所長になるまで本学の教授でした。

在職中、旅行部時代から山、スキー探検の方面の世話をされた功績は非常なものです。学術

探検の報告で重要なものがいろいろありますが、昭和13年の内蒙古の探検は有名です。27年のヒマラヤの調査は木原君が西堀栄三郎君と一緒に印度に行つて、ヒマラヤへの道を開いたことからはじまりました。その学術報告書三巻は木原君が editor になってまとめました。30年には自身隊長としてカラコルム・ヒンズークッシュの大探検を遂行し、その学術報告の一部は既に発刊され引続いて相当大部なものが出版されつつあります。

並 河 功

名誉会員 並河 功博士

明治25年札幌に生る。土産子である。父は屯田兵の将校…といつても維新で喰いつめた士(多分足軽)だから、生活はあまり楽ではなかったのだろう。そのオヤジからはチャンバラ術と論語精神の手ほどきを受けたらしい。多感なりし青年時代は洋画家になろうとしたが「不良のやるような事」というわけでダメ。軍人になるには目が悪く



てなれず、仕方なしに教授コースを歩いた。北大予科教授当時、日本で最初のスキー大会や中学生による駅伝競争を企画したりした。雪の山はその頃にずい分歩いたらしい。ある時はカムチャッカの各所を人のよいロシア人と道連れになりながら歩き廻ったが、一体何が目的で、何をしに行ったのかは私にもサッパリ判らない。魚を喰った話は何度か聞いた。多分「ジャケ(サケに非ず)の味に及ぼす植物分布」の影響でも調べたのではあるまいか。美しい純白の火山の姿は今も古ぼけたアルバムに残されている。

ヨーロッパに遊学した際にはアルプスの氷を充分楽しんだ。以後は自分自身よりも、グループとして探検登山を行う事に異常ともいえる程の興味を持ち、またその企画や実行には心から楽しみ、意義を見出していたようだ。

専門は本人にも判らない。夫人の言によるとマヨネーズを作るのは教授級だそう。酒の鑑定と孔子の生れた国、シェイク

スピエの祖国の言葉は達者である。現役時代には園芸学の講座を担当していた所を見ると、園芸が専門らしくもある。サンズイのついたエンゲイは見聞きするだけ。

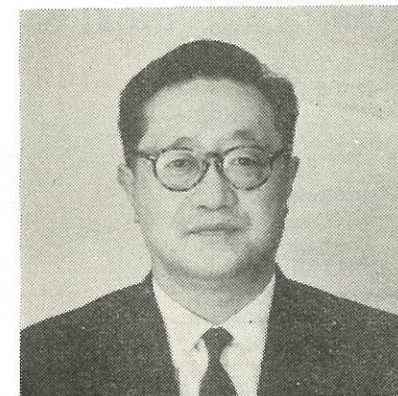
きげんがいいと「ランタン(ロンドンではありません)ブリッチズフォーリングダウン」という歌のようなものがとびだすが、これは6人の子供を寝かしつけた子守歌でもある。趣味は読書、花作り、人間を含めたあらゆる生物を相手にする事が好き。

並 河 治

佐島敬愛氏

佐島敬愛の紹介には今西錦司、加藤泰安など適当な人があろうに、どうして私の所に廻ってきたのであろうか。ノジャック登頂に発揮された筆力のほんの一部を出してもらえばよろしいのですから、などと若い人もなかなかうまい事を言うものだ。

佐島敬愛は一言にして言えば秀才である。それも青白くなく、80キロ近くもある巨漢である。小学校の頃は劣等生として特殊クラスに入れられていたのが、三高を出る時は首席であった。三高当時、ある事件で今西錦司と一しよに停学になった事があるが、その時先生が「君は今西君などと遊んでいたのですか」と言ったのは有名な話だ。日本の大学のようなけちな所へは行かんと称して、ウィスコンシン大学に行き、そこも首席で卒業。この分でゆけば今頃は首相にでもなっていなければな



らん道理であるが、過ぎたるは何とやら今はICCの事務総長におとなしく収まっている。世界各地を股にかけて飛び歩き、その経歴から言えば秀才というより怪物の方がふざわしいかも知れない。

古くからのACKの会員であるが、遠征があるからといって金集めに奔走したりなどしないのは、そこが秀才たるゆえんであろうか。実業界には知人も

多く、少しは動いてほしいと願っているのは私ばかりではあるまい。佐島はん、頼みませ、頼りにしてませ。

ところで、その佐島敬愛が先年京都に現われ、三高会に出席して「紅もゆる」を斉唱した時、感極まって涙を流したという事があった。今西錦司はこれを鬼の目にも涙だと評したが、自分は仏であるような口ぶりは笑止なことであった。

酒 戸 弥 二 郎

〔会員の動き〕

東 滋 昭36年10月 アフリカへ、ゴリラ探
検隊
c/o D.C. Kigoma, Kigoma, Tan-
ganyika (以下ゴリラ探検隊はこれに
同じ)

伊谷純一郎 同上

伊藤洋平 昭36年10月下旬 アメリカから帰国

今西錦司 昭36年11月初旬 アフリカへ、ゴリ
ラ探検隊

今川好則 昭36年5月1日 パキスタンより帰国

萩野和彦 東南アジア学術探検隊員として昭36年
9月 タイ、マラヤ向け出発

笠原大四郎 昭36年11月末 アラビア向け出発

吉良竜夫 昭36年12月10日から1月15日まで
タイ、マラヤ

笹谷哲也 雄昌行気付、香港、工門利街30、四樓
Shong Chong Traping Co., 30 St-
rahley St., 3rd Fl, Hongkong.

四手井綱彦 昭36年7月から8月までパキスタン
にてサルトロ交渉

四手井綱英 昭36年12月10日から1月15日まで
タイ、マラヤ

高村泰雄 昭36年6月3日出発 12月12日帰国
パキスタンにてサルトロ交渉 リカー
氷河からサルトロカンリ偵察

田附重夫 昭37年5月 帰国予定

富川盛道 昭36年10月アフリカへ、ゴリラ探検
隊

中島道郎 昭36年9月初旬 出発 アメリカ留
学 36 Copeley Hill Charlottesville,
Va, U.S.A.

堀了平 昭36年11月 アメリカより帰国

前小屋端 10月22日 パキスタン向け出発
パンジャブ大学にて地質研究,
234, New Hostel, Govt. Colledge,
Lahore, West Pakistan

×× 編集後記 ××

◆1961年度のAACK総会で「時報」の発刊が提案さ
れ可決された。そして木曜日に於て実際にその発刊に
動き出してから半年以上もたってしまった。諸種の事
情があったとはいえ申し訳ない。

◆この時報は桑原会長が責任編集者となり、これに林
一彦、平井一正、北村泰一がたずさわっている。しか
し実際には谷泰、酒井敏明、高橋旨象の活動に負うと
ころが大きい。

◆この時報は年二回6月と12月にAACKの動勢を
会員に伝えるべく計画されたものである。編集者の気
持としては、とにかく絶やさぬ事を強く希望してい
る。会員諸氏のふるった投稿をお待ちする。テーマは
何でも可。特に会員紹介、会員の動勢近況、AACK
の30年、又は記事の誤り補遺等々には豊かな資料が
のぞまれるので諸氏の協力を期待している。

◆この時報に対する一切の事は

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部

近藤良夫宛

送附願います。猶投稿の場合4月末日又は10月未
日が一応の次号のメ切期日となっている。次号は
サルトロ・カンリ遠征 速報として12月発刊を予定
している。

— 編 者 —

昭和37年3月20日 発行

発行所 京都市左京区吉田本町 京都大学
社団法人 京都大学 学士山岳会
TEL (7) 4111 内192

編集者 AACK会長 桑原武夫

印刷所 株式会社文功社

